断片

二〇一五

u_

(嘘を見破ろう…)

嘘を見破ろうなんて。見破れた嘘を何故見破れたかは、知りようもないのに。知れるようなら、その知れる事が嘘で、その嘘を信じ込まされるために、そう知れるよう仕組まれただけかも知れないのに。それなら、その嘘によって吃驚するような酷い目に遭うのなら、どう。何が知れようと知れまいと、その嘘を嘘と思い知らされる。しかしその時には、嘘は為すべき事を仕遂げて嘲笑うように遙か彼方。或いはすっかり嘘に取り巻かれ身動きも取れない。にしても何も起こっていない。その酷い目が、例えそれで命を落とそうと、嘘でないとも限らない。なので抑も、嘘など見破ろうとするのは、嘘と訳の分からない泥仕合を続けるだけで。何が嘘であろうとなかろうと、どの途、酷い目に遭うに決まっている。とでも諦めて置けば、途は開ける。尤も途は常に開かれていて、途を閉ざすものがあるなら、それは嘘を撥ね除けてしまうもの。例えば、命だけは決して落としてはいけないと、強いられてしまって逃れようがないとか。嘘であるかどうかなんて、どうでも構わないとか。しかしそうした時にこそ、

嘘をちゃんと働かせられるなら、彼は、己の力で途を開いたような。しかしただそれも実は、何も起こっていない。嘘がその嘘なりの事を仕遂げただけ。いや何も起こっていないは言い過ぎでは。嘘は活かされたのだから。しかし活かされたなら、誰がそれを指差して嘘などと言える。尤も嘘は初めから撥ね除けられているので、嘘の事など忘れられているけど。そんな訳で彼は、命を落とさずに済んだ。彼の力でもなくて、予め嘘が彼から撥ね除けられていたから。偶偶そうなるようになっていたから。それをすんなり受け入れられたから。中には自ら進んで嘘の方へ出張って行って、嘘と渡り合おうなんて奴だって居るだろうに。そんな奴はきっと焼き殺されにでも行くようなもんで。そう、嘘の中には、と言うか、その行き着く先か何処かには、嘘に取り込まれた身を焼き尽くす火が強く、絶えずに燃えている筈。そんな事にならずに居たいなら、身近に常に火を燃やして置く事かな。でも何のどんな火？　嘘を見破ろうとする目にも、必ずその火は映っていて、その遠い火を目指せば、嘘を見破ろうと自らその火に焼かれに行くようなもの。でも側に、燃やして置ける火が見当たらないなら、それを探しに、その目に映っているのを信じて、その目の光りを頼りに出掛けて行くしかないのでは。それはもう、焼き殺されに行くようなものか、それとも例えば、その目に映る火を、もう何処へも出張らず立ち止まって、その目の中にだけ燃やせでもしたら、それが彼を火から守ってくれるとか。勿

論そんな、虫の良い話しなんてないけど。それならきっとその火は、何処かから与えられたんだね。そうしてそれを何処かに忘れて来たりせずに、ずっとその手に守って来た。でもその話し、嘘だよね。どう嘘かは、さっぱり見破れては居ないけど、見破るも何も、今作ったばかりの嘘だから。そんな嘘を撥ね除けたとして、いや撥ね除けるしかないんだけど、だって火は必ず手の中に有って、それだけを目に映して、そこにじっと蹲るしか、途は開けないじゃないか。ふん、途を開くとはまた意気込んだね。そんな途なんて、何処にもないって。火がどうとかさっぱり忘れて、それにはもう、綺麗さっぱり焼き殺された事にでもして、いや違う、焼き殺されるとかなんて事は知った事じゃないって事で、空っぽの手を空に翳して。そうして目を上げて見れば、その火とやらに燃やされたやらの煙とやらが薄く立ち昇る姿が、それを指差す指でなぞれるようにくっきりと、隅から隅まで燃えるばかりだった空の真ん中に。それだよきっと、何がそれか知らないけど。でも真ん中でもなさそうかな、真ん中じゃ困るし、真ん中な訳ないしね。ずっと端っこのその姿が、ずっと端っこだから少しずつ、

（二〇一五年一月七日）

（座れば必ず…）

座れば必ず同じ眺めで動かせないのは、のそりと山の右の裏から回り込む川にも見える歪な形の湖に薄っすらと張る、氷の上っ面を滑って流れる色が、そこに現れる筈もないような深い緑で、緑と決め付ければ緑とも何処か違って深過ぎて、そうであるばかりに、湖の底へ鋭く切り込んで行くかの氷の尖った割れ目の縁の傾きから目を離せないからに違いないが、それはそれだけの事で。それよりも、と目の少しばかり浮くなら山は。座ればずっと真つ直ぐ見据えている山を言い表す一言も転がり出ない。と今更に心付くのかそれとも、いや見据えてなんて居る筈もなく、それは、じっとりと押し被さって山の形にも滲み込みそうな空の青の、ざわざわと騒がしいせいかも知れないが、それもそれだけの事。では姿など蔑んで、山を前にするなら山からの音の限りを耳の底へ底無しのように落とし込もうと、ひたすら耳朶を尖らせていたとか。いやそんな音なら、座って直ぐ、他では届きそうにない小さなその切れ切れまで、あちらこちらに弾け飛ばされそうにも溢れていたのでは。いやそんな音でなく、そんな音へ傾けられる耳にはまるで届かない、そんな音らのまるで鳴らない隙間隙間に籠もって、その響きを硬い石のように自らの中へ閉じ込めている音を、その音と聞き取るようにでなく、その音の姿の現れそうな辺りを見詰めていた、或いは、見詰めるような振りで探っていた、のは確かな事か。の、その確かを

問うたのを限りに、色という色がぱたりと色であるのを已め、その滓か何かが何処か恐らく同じ方へ、湖の水の孰れ流れて失せそうな方へか、流れたのなら、硬い石に閉ざされたかのまま、順に並んで同じその響きが幾つも、その姿をぽつりぽつり捻り出して已まないのを、呆けたように受け止めるしかないのでは。そんなの望みもしない、受け止める振りもそこそこにそこらへ抛りたいが、その響きの並ぶ姿が、それらを響かせてしまうものの姿までもこの眺めの真ん中に映し、その濃い一つの影が湖の氷に酷く重そうに落ちれば、そこで氷が醜く割れて深過ぎる緑とも知れない色は泥のように溶けないか。それが眺めの溶けるのと同じなら、溶けた眺めが、それを見るものを呑み込まない筈もなく。しかし、どうやらその濃い影は押し返せたらしい。甲高く立て続けに罅を走らせる氷も、眺めの溶けずにいられたのを歓んで。であるにしろ、独り濃い影の主が山を揺さぶり続けているのは、どうともならないままで、それが山の分厚い森の奥に見失われても元の眺めではない。ただ眺めの後ろでなく、もっと違う何処かへ身を翻すしかない、必ず全く、さも出し抜けに。それには初めて聞く昔の話し、しかないよ。で、そんな話しなら、空の青のざわざわした中の塵のような重みの傾く端に散り散りに零れているのが分かれば、拾うのは容易い。でそれは、埋めてしまった話し。埋めてなければ昔の話しは残らない。埋めた話しが埋まっていて、その埋めた辺りへと空の重みは傾くよう。で何を埋めた話

しかって、そりゃあの影の主を埋めた話しだろ、いや違う。湖の氷に落ち掛けた影は影の影。あの影の主が骨まで影。そのまた影の主を埋めた話し、恐らくね、だって音と聞き取れないような音を立てる影の主なんて埋めるしかないよ物騒で。でも、なら掘り出す、そこを掘って掘って掘り続けるしか、の、そこって何処。どうやら空の青の騒がしさだけが頼りとは、ざわざわと心許なくて、とばかりも言っていられなくて、その心許ないざわざわの、陽に輝く明るい青のざわざわと、星を輝かす暗い青のざわざわの交わる、そこがそことそう信じて、そこを地の底まで掘る勢いで、コツンと当たって拾えたそいつが、そいつかな。形からして空の青を象った器か何かの割れた欠片に違いないなら、兎に角そいつはきっと、山の明るい方も暗い方も歩き回りたくて何ともならなかったんだね。歩いて歩いて山一つ踏み潰せばもう空の青は、（二〇一五年一月十三日）

（急く程に足を…）

急く程に足を縺れさせるものに先を塞がれるのは、もう遅れてしまっているからで、遅れてないならそんなもの、常には目にも留まらない。遅れたのは、

まだ夜も明けていないからと言って、寝過ごしたからではないものの、それよりもっと酷い下らない事に訳も分からず係ずらわったからに違いないが、それは申し開きには使えないし、抑もそれを少しも思い出せず、僅かずつまた眠りたくもなりそうなら、寝過ごした事にして、いややはり寝過ごしたのではと、それならそれで構わないが、などと考えは揺れながら、足はまた一段と鈍くなり、焦ったところで時は戻らない、なら別に鈍まな足に歯軋りも眉を顰めるもない。目などきっと死んだようだろうな、と、その死んだような目と鈍い足に先行きを全て委ねて、歩くままに二度寝の出来ないだろうかなどと、そんな事を頭に浮かべる自らを嗤いながら。とは言え、嗤う自らには何も委ねていない。嗤う自らを叱る自らが居て、しかし他でもないそいつがウトウトしているようでは、先は覚束なくもあり、だから死んだ目と鈍い足を頼りとして間違いでなかったと、ほっともする。どうもしかし、そんなようにゆらゆらしているのがどうしてかが、分からない。何処かそれを考えてはならないような心持ちでもあり、その分からなさに馴れるしかないようでもあるのかな。そんなこんなで先を塞がれ塞がれ、それでも足は進めば、当たり前にそこへ辿り着けはする。ただそのそこがどうも、少しも当たり前ではなさそうなのは、そこに待つ筈の者の影も形もないからで、ぐるりと三回回って戻った所で、辺りに飛び散る血の色か、の、闇から洗い出されるように数え上げられるのは、余りの静けさに

誘き寄せられて高く低く群がる火に照らされるからだが、火の勢いはそのままに、血の色はまた直に闇に溶けそうなのは何故。それこそ全く考えてはならない事のようで、夜の白むのと引き替えに、態と見向きもされない闇は放られ、そこへはもう立ち入る用もない。それからは前にも増して、寝過ごすよりもっと酷い事に係ずらわされたか進んで係ずらわってしまったか、しかしあのゆらゆらは戻りそうにないな、と思い至れば、謎の解けたかのように、鈍いにも程があると呆れる程に鈍い足は、覚えていた筈の所へ戻って、そこを掘れば掘っただけ、屍の欠片が土から次次生えて出でもするように熱さえ孕んで拾われるが、今更それが何。遅れてしまっているとさえ心付かなかったとは。これは俺の屍じゃないのか、そんな訳ないが、と直ぐに呟き直しはしても、あのゆらゆらが来て、酷くなって、当たり前だ、俺の屍である筈はない、それよりもっと酷い事を目の当たりにしているから、それでゆらゆらも酷くなるばかり、って事か。で屍つて何だっけ。拾い集めて手に一杯だけど、こんなの土塊と何が違うのに手に一杯どころかもう、ばらばら崩れて何もないよ土埃だけ。でもそれが風に戦いで巻けば、ゆらゆらもそれに巻き取られるように失せて、死んでも決してそれは戻らないと分かって、何故ならそれは、空が青いから、掘った土が黒いから、風が木の芽に仄香るから、後何でも良い、どうでも良い下らない訳でそうなってしまうのを耐え難くても、何処へも痛みは叫べない。死んだ目

にさえ何一つ委ねられず、寝過ごすよりもっと酷い事にギラギラと血湧き肉躍らせでもしなければ、少しの間も持たないとはね。教訓‥一度切りの事に遅れるのなら、それっきり。でももう役に立たなくてそれ、なら教訓でもないな。その分、俺は俺の屍の事なんか知らないで済む。そんなで手を打ったとして置けば、打つ手の音の響く先には、はっきりと、少しも何も現れないのが見通せる。そのはっきりと、が何とも言えないね、言ってるけど。はっきりと、ならそれを曇らせる何も見付からず何処までもはっきりで、それで命の残りもはっきりと数えられる。そう分かっても、それっきりなら、（二〇一五年一月十四日）

（死んでない…）

「死んでない、死んでいないない私。」そう、そう声に出せたのなら、必ずそうで、それにもう、命を奪われるような事ならすっかり起こってしまって、再びそんな事の起こりようもないなら、これからはただ、死んでいないそのままに、さらりとあなたは時を過ごしている。そうである他はない。その声はずっと延びていて、ずっと続いて行きそうなので、もう声に出しているとも分からない

し、聞こえている筈なのに、何処にもその声を見付けられない。日は広く明るいのに拒む。常に拒むから広く明るい。狭く暗い月は拒まない。だから狭く暗いけど、却ってそれできっと何でも呑み込める。嘘も皆呑んで、腹の中で溶かすかして、もう嘘だったと分からない水か何かにして流してしまう。もうあなたの声も、そんな辺りに流れて行ってしまっていないかな、だって嘘でない声なんて聞いた事もないでしょでも違う、声が嘘なのが嘘に決まっている。狭く暗い月だなんて全く嘘に騙されてるんで、暗いのは日の方で、朧で険しくて狭苦しくて何時もギリリギリリと何処か見えない一点へと渦でも巻くようで、日の下でそれに巻き込まれないで居られるものなんて、産声を上げ損なったばかりの赤ん坊か、ふと息を止めたばかりの屍位。それからしたら月の明るさなんて全く窮まりなくて、それに照らされて死ねるものなんて有る筈ない。そう、あなたの声のままのように、色も形もくっきりと動いて一つも止まらず、月の裏にまでだってずっと行き渡って、でもそれで済まないのは月の高みのせいで、月が照したものは皆、月に呑まれ、月と同じにまで引き上げられて、空を住み処にそこで息をするしかないんだよ。そのそこって何処、そこで吸って吐く息って何。なんて思ってしまえば、色も形も皆月の光りに溶けて、月の腹の中に呑み込まれたきり再び姿を現せないような。いやそうなら、もうあなたが声を出せているとも分からない筈、声が何だったかも思い出せない筈。その声の、

「死んでいない」って、そう言う事でしょ違うの。なんて尋ねてしまうから、詰まらなくて下らなくて見窄らしいに決まっている答えを、暗い流れの淵辺りにまで探りに行きたくなってしまうのは分かっているけど。で、もうここはその淵かな、そうと言ってもそうじゃないと言っても嘘にしかならない、淵。ふむ、でもそれならそれでそこは中中居心地良さそう。溺れるには持って来い、なんてのは図に乗り過ぎだけど。嘘という嘘が、その淵の底を抉って行くのが見下ろせるだろ、そこへは月も光りを届かせられはしない。だって淵の底の深さを測り取れるなんて、尻尾が出てるじゃないか、月にも呑み込めないその尻尾が。それが震えれば、それを震わすのが、声。それで何の嘘も洗い流されれば、天の果てまで満遍ない月の光りをひっくり投げて、声は真っ直ぐ日までも貫くだろうよ、なんてその声はもう決して何処からも出て来ないとはっきり分かって、宥め賺すようにその声色を淵に沈める手付きの醜く態とらしく動かされる様の全てを照らす月の光りから、どう目を背けて良いのやら、嘘と窮まった声ならば少しは頼みとなるかとしか。でもまあやはりと言うべきか、嘘の声の声色が一つ塊に、捥げた片腕のように、淵を底へとぬるりと溺れて行く姿を追うばかりで、

（二〇一五年二月二日）

（命の山分けは…）

命の山分けはない。命が一つ長らえるなら、代わりの一つが必ず殺められる。
「この広広とも見上げられる空は、それ程に狭い。空より果てのないものも見当たらない、その空の狭さに心を砕いたところで何になる、逃げられるでもなし。しかし事は命、他の誰のでもない。二つとない狭い空の下、何故そんな命の遣り取りに引き摺り出されたか、どうせ答えなど知れた事で。それでさて、その一つの空の下に、まるで奴は山の中に隠された小さな底なしの池に溺れ掛けても居そうだが、空の下からとは違って、そんな池からなら逃げる手立てもあるに決まっている。それを残り僅かの弱弱しい時の中で活かせるとは決まっていないが。もう時からして弱弱しいようでは、逃げる手立てに逃げられて身を震わせるばかりでも、狭いせいで空はゆらゆらと変わり易くもあるなら、さも広広と巧まれた企ても、風が変わるように吹き散らすのが救いで、とは言え変わり易いには違いなく、出来る事の何もないのも変わらない。などと考えている俺は、俺には他に考える事もなくて、どれか一つの命を取れば綺麗さっぱり露と消えて、ひょっとして一雫のその露が、一つしかない狭い空かも知れなくて。いやそんな考えも捨てた筈。筈が、そう考え浮かぶのは何故。空の変わり易さばかりでもない事が、俺の身を突き動かしてか。いや待てこれは俺が考え

てるんじゃない、いやこんなの考えでもない。」変わり易いなんてない。全ては定まっていて、定めなんてどうにでも変えられる、定めと知られさえすれば。知れない定めは変えられないが、知らずに済むだけの事。「うん良い事を聞いた。楽しいだろうな、それ。」それだそれ、掴まえたぞ、この先は楽しいが全てさ。後は定めの行く末をじっくり変えて。さて先ずは山深い奥の小さな池を見付けないと、でも訳ない、この空きっ腹がたっぷりと、その池だとすればその池で。そこから見上げられるただ一つの空も池に呑まれて。つまり私なんてのは、夜の、もう夜だね、全てを照らす月明かりで、空も空の下も、その月の腹にすっぽり収まった、なんてどうかな。どうかな、だよ、ほらそれでもう、定めの向きはちょっと変わったね。ちょっとってのは、ちょっとなようで。もう殆ど丸ごとだから、て言うか、丸ごともちょっとも定めからしたら同じで。だって命の山分けはないって、それでほら、楽しいの壺を押さえたって事さ。出来た。「何が楽しいもんか。」とんだ遠回りさせやがって。俺は今まで真っ直ぐでなかった事なんてなかったぞ。」さて帰るとするか。「さっさとな。この先俺の耳に入るのは、楽しいの真逆の、うだうだした悔やみやら独り善がりの嘆きやら恨み言やら、ああ俺しか聞き役は居ないから聞いてやるさ。例えばこうだ。変わり易いなんてない。全ては定まっていて、定めなんてどうにでも変えられる、定めと知られさえすれば。知れない定めは変えられないが、知らずに

済むだけの事。でも済むって何だっけ。なんてね。それってつまり、回り回って、定めを変えるも変えないも変わり易い儘だったたって事だろ。だろって言っても、もう帰りやがったか。いや待てこれは俺が考えてるんじゃない、こんなの考えでもない。ただ空がうんざりする程、幾らうんざりしてもどうにもならず、変わり易さで溢れ返って狭いままだって、それだけの事。それもまあ命一つにとってはで、俺には係わりなしだが。ふんまた俺が出て来てしまう辺りは、あいつみたいにはまだ帰れないって事か。いや帰る所なんて、この狭い空か空の下しかないじゃないか。あいつ何処へ帰ったんだ。ああそぅか、（二〇一五年二月四日）

（何処から始めれば…）

何処から始めれば良いのか、ここしかない筈なのに、で考えが止まってしまうのは何故。しかし止まっては居なくて、止まっていないままに留まるには熟熟思うしかないなら熟熟思うに、とは言っても、何故熟熟思ったりしなければならないか、どうせ止まってはいられないままだろうに、と思うに、どうやらそれは、そう考える私の他にもう一人の私が居ると思えてしまって何ともなら

ないから、に違いない。それをどうにかしなければ、ここしかないなどとも言っていられなくなるし、どうにかしたら、ここしかなくなってしまうようでもありそうだが、どうもそのもう一人の私と言っても、私とは似ても似つかぬ、どころか、似ているか似ていないか見分けようにも何を何と比べるべきか見当も付かず、恐ろしく離れた所のそのもう一人の私からは、その私にとってのもう一人の私である筈のこの私の事などまるで見えて居なさそうだし、見たいとも思いようもなさそうな、そんなもう一人の私であるらしい。いや、そんな事はどうでも良くて、この私は、そのもう一人の私有っての私でしかないながら、そのもう一人の私からは、私である事を綺麗さっぱり拒まれていて、それでやっとこの私でしかない私なのでは。それならこの私の方から出向いて行かなければならないのは明らかで、ただそのために私はずっと私を私と呼んで来たので、この私であるしかなかったに違いない。さてそうなら、この私は、私と呼ばれるのを口籠もりでもされようなら途端に何処の誰とも知りようのないものでもありそうで、却ってもう一人の私の方に私を委ねたくもさせるが、却ってと言うなら却ってそれで、そのもう一人の私は、寧ろ彼とでも呼んだ方がずっとそれらしい、彼らしい私で、もしその彼と面と向かえでもしたら、誰とも知れない誰かが余所余所しく、あなたとでも呼んでしまって、しかもそのままうっかり見失ってしまえば誰一人居なくなってしまいそうな、そんなもう

一人の私で、それなら私などと呼ばれる者など初めから居なかった、で済ませられそうでもある。…そうでもあるが、そうはならないのは、それはやはり一人だけではないからで、こちらに一人そちらに一人のままにはして置かれないからで、こちらとそちらを繋ぐものがあったにしても余りにも空っぽで、その空っぽに運ばれて流れ着いたのがこのここであるからで、いや、そんな事がどうして言える、しかし言えてしまえるのは何故、などと考えながら、何処かの誰かは、何処かの誰かのままに、もう一人の彼の方へぐんぐんと出向いて行っていて、もうかなり、限り限りまで近付いても居るに違いなくて、すると彼の姿は益益余所余所しく遠くへ離れて決して会えないようで、するとその彼ではない、またもう一人の私がそっと身を起こすようで、その私の方が、この私より勿論彼よりも余程私らしくて、そうなるとこの私などは愈愈何処の誰とも知れない者に成り下がって行くようでもありながら、しかしこの誰とも知れない私有ってのその私らしいもう一人の身を起こす私であるのは疑いようもなく、それなら後はこの誰とも知れない者を、その私らしいもう一人の私に限りなく近付けて行けば、私は、このもそのもないただ一人の私に収まりそうでもないか。その見通しは全く正しい、いや正しいも何もそこにしか先はないが、見通しだけあっても何も始まっていないのも全く確かで、それなら私は、その確かさをしっかり手に取れてもいて、それにたっぷりゆっくり息を吹き掛けも出来

る。それを何と呼ぶべきか、それが呼ばれるべき最も相応しい名に呼ばれなければ始まらないが、それが分かれば苦労はなくて、それならそれを取り敢えず、何も彼の名で呼んでおこう、とは言うものの、彼の名を知らない。しかしその名が非の打ち所のない、欠ける所の全くないものの名であるのだけは確かで、何故なら、全てが彼から始まったいや違う、始まりを隔てた始まりより前に、彼が彼である事で私は私であるのさえ危うく拒まれ掛けて、そこに空っぽな容れ物が誂えられて辛うじて、何処かの誰かとしてでも居られる所へ運ばれた私にとっての彼であるからで、それならその名は、空っぽな容れ物に決まった名が要らないように、その辺りに飛び交っている呼び声の欠片を拾ってその名としてしまっても構わない。さてその欠片は当たり前に全く空っぽな名なので、聞き取るまでもない口から出任せのそれを、それらの飛び交う中に撒き散らしていて、そうして彼の姿を見上げるようにでもしていれば、行き着く所は決まっていて、そこに彼はずっと遠くに隔たっているようでありながら、彼が私を拒んだように私が彼を拒める所に図らずも身を晒していて、図らずも、と言うのは、抑も彼が私を拒んだ事が、図らずもだからで、とは言えその図らずもだけがずっと彼と私を導いた挙げ句が二人の私の擦れ違い、溝は埋めようもなく。いやその溝を埋めるために、またもう一人の私を、彼も私も待ち望んだのでは。そのために彼と私は、拒むか拒まれるかの必ずどちらかが消し去られるしかな

い狭間に身を擦り込ませて、黙るのが彼の遣り口なら、何処の誰とも知れない私は、彼の名を呼び立てては捻じ曲げ、その捻じ曲がりようを言い立てて、彼の黙りに立ち向かうのが取り柄。それをどうにも出来ずに益益黙り込むしかない所へと彼を追い詰めて。いや彼を追い詰めようはない、初めからずっと追い詰めようなどなかった、寧ろそんな彼であるのを明るみに出すのが肝腎で、そのように彼を空の彼方へでも飛び去らせれば、何処かの誰かの私もまた、海の底へでも藻屑と消えて、またもう一人の一人残る形の私だけが、自らを私の事とも知らぬげな、昨日までの事など何も知らなかった風の顔を空からも海からも賢く背け、その私の身の丈と同じだけの狭い方へ、どんな向かい風も撥ね除ける熱く濃く乳臭いような小さな長い息を潜めるなら、水の底をゆったり揺れるばかりの何処かの誰かは、その誰かの私の姿を空っぽそのものとしか懐かしめず、それはずっと空を行くばかりの彼へのそっと弱弱しい眼差しともなって、濁った水へ、もう濁った水と見分けも付かない身を置き去りにして、失われた私の窮まった似姿のような大きな円を、水と言う水のその果ての縁を巡るように、描ける筈もなく描こうと、彼への眼差しもすんなり焼き焦がす途切れ途切れの熱過ぎる息を弾ませ弾ませ、などと言う私の、もう私には戻れないのは分かり切っている、もうすっかり失われたか知れない乏しい影を探すのは、(二〇一五年三月一日)

（謎が解けてそんなに…）

「謎が解けてそんなに嬉しいか。それで途方に暮れていた事が捗って楽しいか。謎からしてみたらそれは、お前らに囲まれて殴られ蹴られ嬲り殺しにされて、面白がられて八つ裂きにもされるんだ。まるで謎を分かっていない。手に掛けたものよりずっとお前らは愚かで、謎を解いただと勝ち誇るなど、嗤うしかない。」そんな事を日がな一日繰り返し喚いて見向きもされず、直に見掛けなくなった奴が居たが、何のために何の事を言っていたか。その謎を解こうとするのもきっと愚かだろうが、思うに、この世に有るもの更に無いものまで含め、謎でないものがあるか。そのどれか目に付いた一つを嬲り殺して謎の正体を暴くような真似をしても、八つ裂きにされたそれを片付けた後を、直ぐまた別の謎が取って代わるだけでは。いや抑も謎の正体など少しも暴かれてはいなくて、何を八つ裂きにしたところで、八つの謎がそこに裂かれた姿で並べられただけ。しかしそう考えてしまうと逆に、どんな謎も及ばない、謎とは別のものが、中中目に付き難い何処かにありそうで、例えば、月明かりを浴びるその悉くは静かなままに謎であっても、ふと濃く茂る小さな藪が浮かんで、月明か

りの届かないその奥に、闇に溶けて謎とも違うものが、月明かりを待ち焦がれているとか。いや待つばかりでは居られない、きっとそいつは藪を後に、一つの謎のような身形で、怒りを込めて足を地に打ち付けるような確かな足取りで、明かりに塗り込められた中を抜けて行く。その身形の崩れない限り、謎ばかりのこの世の習いに馴染んでいられるが、流石に月明かりはその僅かな綻びを見逃さず、そこに、謎では埋められない小さな闇が暴かれてしまわないか。月の下を終の住み処とする、ただ謎であるばかりの者らに見咎められれば、それは彼らに、快い眠りから行き成り引き摺り出されたようなザラザラした心持ちで、見た事のない難しい謎、しかし必ず解かれなければ困る謎、とでも呼び回され、囃される。あの喚き声の、解けて楽しい謎とは、そんなものに違いない。実はそれは、謎ではないものを、謎だらけのこの世から追い払う事、それによってまた、さらりと謎に埋め尽くされた、一続きの月明かりに覆われる安らぎを取り戻そうと言う企みらしい。その、謎によって謎扱いされる謎でないものの謎が解けずに、謎だらけのこの世に何時までも居座られたら、謎が謎でなくなり兼ねない恐れもあって、ぐずぐずもしていられない。しかし謎が謎でなくなるとは何。謎と謎でないを分けるのは、謎は何が謎か知らない、自らが謎であるとも知らない、その一方で謎でないものは、自らに謎がないと知っている、きっとそんな事。何故そう知れたか、元元謎の外に居て謎ばかり見詰めていたか

ら、とでもしてみようか。そんな事でなければ、ずっと謎のまま、自らが謎とも知らずに過ごせたかも知れないと。「ふんそれで謎を一つ解いた積もりか。何の謎だそれは。謎でないものの謎なんて解きようがないじゃないか、お前の遣ってる事が謎だ、謎のお前に相応しいと言えばそうだが。」と、喚き声。で、だからそれ、何の事を言ってるんだ。謎はお前だろ。尤も互いを謎呼ばわりしていても始まらないが。「謎が、謎でないものの謎を解く。紛れもなくそう謎が解かれているなら、それは謎の謎が解かれているんだ。謎でないものに駆り立てられて。謎でないものにしたら、そんなの下らな過ぎて近寄れもしないだろうよ。」で、謎でないものって何だ。「知るか。しかしそいつは謎を酷く恨んでいて、藪の闇から抜け出たのも、間違いなくこの世から謎などなくしてしまいたいからで、それは謎の方にも分かって、だから八つ裂きにするしかない。殺らなければ殺られるぞ、なんて温い科白を震わせながら。謎でないものは、謎の悉くを食い尽くすまで、謎の身形で、謎ばかりのこの世に身を置きたかった。いや違う、寧ろ謎を謎のままにして、謎の身形もそのままに、身形通りの謎になって、謎でない事から逃れたかったに決まっていて、だってそんな身振りをされたら、謎は嫌でも、それが謎でないのを見透かしてしまう。いや違う、」違う違うな話しがしたいんじゃなくて、ただ喚きたいだけか。お前だろ、謎でないのを見透かされたのは。嬲り殺しにされたところで、謎でないままでしか

居られないのが悔しいって、それで喚くしかないんだな。「ふん、お前の愚かさは極め付きだな。何処をどう見回しても謎でないものなんてないさ。月明かりの届かない所なんてない、あっても見付けようがない。」そう言えるのは、謎がないと知ってるからだろ。正に謎でないものの言い草だが、いや待てよ、お前が謎でないなら、決してそんな言い草を喚けたりはしない、恨みに舌は爛れ喉は潰れるだろうから。ならお前は間抜けな振りの囮で、謎でないものは黙ってまた、謎に馴染んだ振りの知らん顔で、いや違う囮なんてまどろっこしくて、でもそのまどろっこしさも、（二〇一五年三月四日）

（ふわりと弾け…）

ふわりと弾け、延びては尖って滑るような息の、稀にしか途切れない長い音が、月明かりに拉がれて白く薄紙のような拡がりを、流れる水の腐った匂いの混ざる湿った方へ。その先へ先へ行く後を付けているか、逆にそれに引き寄せられているか、どちらとも定め難いのは、差し当たりは定める用もないからと、兎も角も即かず離れずのまま、いざその時を遣り過ごさないよう身構えながら、何となく足取りは熱っぽくも危うく、立てた耳を硬く傾けて、その三つの色の

滲み合う煌めきを纏う背を追うしかない。しかし息であるより、その延びる音は、形ばかり微笑む唇の隙間に、一つの丸い砂粒に似た風の種をぬるぬると転がしてでもいそうなら、その種から芽を吹いて彼方へまで易易と舞う、低く水へ落ちたそうに棚引く風としての方が聞き取り易い。息と風の違い、さてそれを思い出そうとする程に、頭はぼやけて重いが構わない。三つの色が救ってくれそうなので。一つは月明かりへとしか開かない色、もう一つは月明かりを嫌ってひたすら落ちるように行方を眩ます色、さてもう一つの色が曲者なのは直ぐに分かるが、その何がどうか。ただ後を付けるしかないのは、その色に引っ張られてか。行方を眩ましたならその眩ました所にそれは安らっていようが、その色は何処へ行くもないままに、当たり前に息とも風とも係わらず、さも月明かりに刃向かおうとでもするかに、開かれているともいない行方を尾を見せない。欲しいのは恐らく、月明かりへとしか開かない一色で、一方を眩ます色は切り捨てられても、或いはその色までは混ぜ込めても、残る一色をどうしたものか。そしてその色だけはもう、腐った匂いの流れる水さえ越えて、暖かい草と木の匂いの張り詰めた、月明かりの絶えた昼の闇に区切られた狭い中に届いていて、何時くるりと重重しく向き直って真っ直ぐこちらの眉間へ斬り掛かるとも限らない。などと思い巡らすのは少し先走り過ぎで、何故なら足下が冷んやり水浸しで、そのくせ足は踝辺りのひりひりとも乾いているのがはっきり

分かれば、一歩一歩その色に甲を刺されるような痛みが増すからで。例え月明かりへとしか開かない色だけを切り分けられても、そのずっと手前に強張る身を投げ晒すしかないような。しかし滑る弾みに水は足からさらりと引いて、しかしそれで一息に奥へ一塊に引き上げられた水が、蜷局を巻いて宙に浮くようでは。と言うのも先走り過ぎだが、もうそんな走る足もなさそうで、さてそれで頭はすっきり隈無く月明かりに晒され、再び何の影も湧きそうにないならそれで、けりが付いたようでもあり、後は何の足か知らないが、ただその足任せに先を急ぎに急いで、身を月明かりの果てへ突き当てるまで。で、そうとして、しかし色は変わらず三つ、そこに滲み合い、その煌めきを揺らめかして、もう月明かりへとしか開かない色ばかりを欲しくもなく、つまり、三つの色共同じように何がどうとも。となると、月明かりへとしか開かない色が却って目障り、と言うより「月明かりへとしか開かない色」とは何を言っているか掴み所もなく。それにもう月明かりの果てへ突き当たってしまっているなら、色の三つ共要らない。あの息も風も届かないので。昼の闇に区切られた狭い中さえ抜け、水の流れを渡り切ったのも確かで、それでも地を蹴ろうとする足を自ら押さえ付ける内に、腕も脚もこんがらがったような形で転がる先に、小さな安らぎでも見付けようとするなら、やはり聴き耳を立てるか。知らずに漏れ出る己の呟く声の、色の事しか言っていないのを聞き取れるまで。それは初めから

聞き取れているようでも、際どくも何も聞き取れていないようでもあるばかりでは、強張った身の転がり続けるのも儘ならない。色色とでも呟きたいが、喉は冷たく固まって、息より微かに自ずと漏れるのでないなら呟きでなく。それもまた安らぎではないか、と、そう呟いたと己を欺けば、後はゲロでも吐くようにすらすらとも事は運んで、転がる用もなくなって、昼の闇さえ消え褪せた区切られた狭い中へと戻り掛ければ、その丸い月を刳り抜いたような見窄らしい形が初めて見て取れて、そこに渦巻く汚い色から目を背ける先は、いや、あの色だけが見当たらないその色が、そこを向き直ろうと、（二〇一五年三月八日）

（声、だけど…）

声、だけど、どっちを向いても聞こえてはくれない、どっちがどっちか分からなくなりそうに。その声だけが聞こえる耳を、無くしてしまったかのよう。その耳は初めから、この耳とは別で、そっと二つ重なり合っていたんだけど、その耳だけ知らずに剥がされ取り去られたとか。それで、その声だけに呼び掛けられる声を上げる他に出来そうな事もないらしいなら、どんな物音も撥ね除

けて静まる、その奥の広くは見えて狭い拡がりへふわりと、何もなくて迷いようもないけどうっかり迷い込んだかのようなほっそりとした立ちようで、急いで思い切り泣き叫ぶしかなかった時よりも必ず大きな声で、繰り返しても繰り返してもたった一度切りのように何度も繰り返して、その聞こえない声に真っ直ぐ向かって呼び掛けないとね。でもどうやって、抑もどっちに向かって、と思ってがっかりすればもう、そう、そんな声をそこで出してしまっていないかな。だって聞こえているじゃないか。その呼び掛けの声に怖ず怖ずとも応える、静けさよりも冷たいつるりとした声が。それともそれは静けさの静まりを声と聞き違えたのかな、そうならその静まりの内へ身を投げて、何の音も届かないその真っ新な辺りへ黙って、耳を開いて行く。この耳じゃなく、無くしてなんかいるもんか、って勢いで、その声だけが聞こえる筈の耳を、ずんずん拡げて。奥へ奥へ。耳のその突き当たりの奥に見えるよね、その耳にだけ呼び掛けて来る穢れのない姿が。穢れがなさ過ぎて、却って何処か、すっかり穢れてしまっているような。穢れがないだけ、穢され窮まるのはどうにも出来ないかに。なんて思っても、そんな風なもの、少しも見えてないのでは。そうなら、見えて来るものを全て取り除け、どんなものも見えて来そうにない小さなそこに、またほっそりと立ち直れば、その身ですっかり塞がれてしまう小さな所が見付かって。そこで痛い程に、聞きに来てはならない声を聞きに来てしまったんだと

分かれば、その声は、そう呼び掛けて来る。聞きに来ないで、探しに来ないで、何をしにも来ないで。で、ふと思い至るのは、あれ、声はずっとその聞きたい通りに聞こえていて、ちゃんと聞きたい通りの事を言ってくれるその姿がそこに有って、でもそんな事を確かめようもないなら、聞きたい通りの事が、誰の声でもない空っぽな、でも声であるのは紛れもないなら少しも空っぽでない声になって、その見事に一つ一つが、隔てられて並んで順に落ちて、細く流れて来ていないかな。ああ、それは間違いなく全く穢れている。声と声の、その一つ一つが果てもなく隔てられているなんて、そんな声、聞いた事ないし。果てしなさは穢れに満ちる、なんて腑に落ちても、で、そんなの声じゃないかも知れないけど、もしそれが聞けていたなら、それだけが、それだけが聞き取れる耳に聞き取れる声なのかな、なんて考え込む暇もなく、ちゃんとそれを、その一つ一つに一つ一つ応えられるよう落ち着いて聞き取らないと。するとそれは、少しもこちらの聞きたい通りに言ってくれてはいなくて、でも何を聞きたかったんだっけ、沢山有り過ぎて何にもないような。するとそれは、聞きたい通りなんかよりもっとずっと、ちゃんと聞いて置かなくちゃいけない事を言うようで、そんなのとても覚え切れないようでも、その一息の区切りを聞き終わる度、僅かな息継ぎの間に、その言われた事が、丸い玉のようにすっきり頭に入って、それらが薄く潰され順に重なり厚みを帯びれば、必ず隠して置かなくてはなら

ないような、何で覆っても隠し切れないような輝きが、ぼんやり漏れて滲んで、それは頭になんか入ったんじゃない、直ぐ手に取れて、まるでそれをここへ運んで来るためにその声が聞きたくなったかに、それはその声によって念入りに慈しまれ、いや、でもそれはもうその項垂れる声を離れ、ただそこに置き忘れられたかのままに手に取れるだけで、しかし隠そうにも隠しようはなく、それをその声が黙って見守るなら、それは手を濡らして手からぬるりと滑り落ちて、小さな輝きだけになったようにも見えて、それを隠せるのは、狭い所へ押し込められて冷たく渦を巻く水の暗さだけ。そう思えたんじゃなくて、その声がきっとそう言って、それきり声はもう声でなくなって、小さな輝きを隠す方に回ったに違いない、但し決して水の方へではなく。なら何処へ、回り込める所なんてもう何処にも有る筈ない。しかし何故水？それは何の水？何が水？狭いながら見渡す限り、池も川もない、雨が降っても溜まる窪みさえない、地肌ばかりか、草木の形、葉の一枚一枚の形まで、何もかもがつるりと傾いて、一露さえも決して水は留め置かない構え。それならまた声を呼ぶ声で声を呼ぶしかなく、でもどっちを向けば良いかは直ぐに分かり、直ぐに声は応えてはくれても、掠れて何を言っているか聞き取れない。それならその掠れのままを聞き取れば、それは水のないのを恨んでいるに違いなく、「火は水を全て燃やしてしまって何もかも熱いのです。その輝きも触れない程熱いので、こうしてあなた

に差し出すのです。」と聞こえるのは空耳でも構わない。改めてその輝きを撫でると、冷んやりしていて、「そうですね、これが熱いなら熱くないものはありませんね。」と応えてはいけなかったに違いない。何故なら、それが、その声によって伝えられるただ一つの答えだから。確かに声の去ったのは、何処にも水の見当たらないので分かる。全ては火。応える前に、もし僅かでも何処かに水を汲めたなら、その輝きにすれば恐ろしく暗いその水へ、その輝きを浸して冷まし、（二〇一五年三月十二日）

（知らせは何時でも…）

知らせは何時でも声で来る。来なければ、こっちから知らせるんだけど、声で。でしかなさそうだけど、どうかな。でも知らせなんて来ない方が良いんだから、声でどうかなも何も、どうにかはしたくて。も何も、知らせが来ていたらそれでケリだけど、ケリが付かないでこんな事もなら、そんなで遣って行くんだね、声かどうかはどうでも。だけど、何時来るか知れない声の知らせも、まあ忘れずに。忘れたらそんなの、きっと声なんて出せないだろうけど少しも。ん少しも、って何だ、少しも出ない声も出せたって事でもないよね。でも声を

出すだけなら、ひらひらひらと出せる幾らでも、聞いた事もない知らない声な
ら。でもそんなの、声じゃないのかな、聞いた事もなくて知らないんじゃ。な
ら声でなくて構わない、知らせが届けばね。届けば、ああ声だって、そうなる
しかないしそんなもん。でもそうなるには、そうなるなりの何かが抜けてるよ
うなそうなるなりに、なってしまっていないかな。なのでこんな、声でもない
ような、声でないようなまま声にはなりそうかなくも中中消されそうにないよ
うなものが、ただこんな風にひらひらひらと。て事はもう声の知らせは疾っく
に届いて、ただそれはあんまり微かで薄っすらしてたので、そこからそこの小
さな景色の細かく揺れる音と間違われて、いやそんな景色の細かく揺れるよう
に流れ続ける音が、その声だったのかそう聞き違われたか知れなくて、そんな
声では景色の中に直ぐに溶けて、それを聞こうとガリガリしても、景色の静か
に流れるのを眺めるばかり。なのでそれでケリが付いているのは間違いないの
に、何がケリかもはっきりしないような成り行きが、行き場もなく、でもさも
それが有りそうにひらひらひらと。いや、さてそのひらひらひらも頻る怪しい
ね。ただ静かなだけでは間が持たないかで、何時の間にか静けさそっくりの知
らない音か音らしいものが、景色よりずっとこっちに入り込んで、入り込んで
もいないなら、それを招き寄せたいかに景色の手前を震わせる様が、そのひら
ひらひらだったりで。そんなより知らせだよ届いちゃった。何がケリか知って

も何ともならない程にケリはケリで、その先に来るのって何。ああ考えたくもない、も何も考えようもなかろうね、だって考えられるならケリは付いてない訳で。じゃこれは何、こんな風に流れて途切れないようなこのこれは。まさかまた別の声を待たされてたりして。でそれは何かの望みかな、でもないならいっそ、辺りの静けさを真似て黙ったらどう。それとも黙ってはいるんだよ、なのにさも黙っていられないようなら、さも黙った振りでもして置けば。その方がしっくり来そうで、か、でしっくり来ないから、こんなこれがこんな風で。なんてのはまあどうでも良いようなのは、待たされているなら待つしかないので。「これは。さては、さてはどう、」の、さては、は知ってるよ、知らないけど。知らないけど、知らないままにそうなったのは知っているんで。って、さあ来ちゃったよ待ってたか待ってもなかった声が。でもどうかな、とても知らせとは似ても似つかなそうだし。知らせも何も、初めから知れちゃってるようで。ただ物をぶつけて擦れただけの汚い汚い汚い音を声に似せようとして、まるで見事にしくじったみたいな。で、でももう待つ事もなさそうなのも全く確か、そのなさそうだけが、全く確かに、そことそこの間の狭い景色を行ったり来たり。つまり初めから知らせも何もなかった、って言うか、知らせなんて知れてるんだよ高が。それより狭い景色が透き通り過ぎてるせいで、だって他に何のせいでもないだろ、それと全く逆の真っ暗な、きっと真っ暗な所から出て

来たんで真っ暗なような奴がとうとう景色の方へ潜るように棘棘した一塊に躍り込んだって事。そりゃそうなるしかないよねそう、それが事、全く事だ事なんだ。でもそれだけの事。それだけでない、事よりもっと別の何かが、何かと言っても、すっかり分かってもいるけどね、知らないけど。分かっているのはすっかりそれがそうなったのは、知ってるも何も、そうなるしかないんでそれでこれがこんな風なんで。そんなそれを知らないってんだから、全くどうにも知れてるんだよ、動かしようもないよ今更。なら、ただ動かされようもないなりに、時をじりじり食らった春風の見掛けでも装ってみようかな、なんてのは、早まってると言えばそうなんだけど、もう早いも遅いもないに決まってるなら、何をしようともする事もなくて。うんこれがケリってもんじゃないのかな。でも奴、あの暗い塊の姿のあいつはどうなった、まだまだ全くケリは付きそうにない。って言うか、あいつなんだよ抑もが。何をどうしたんだっけ、あいつ。知らない。そう知らない。知ってるけど、知ってるのに知らない、そんなんだから、知らない。その知らないが抑もだよ、それは知ってるよね。それだけは全く知ってる、も何もそれだけ。あいつのせいで全く。そんなあいつ、抜け駆けするように景色の方へするりとね。尤も奴と景色は初めから通じてた、も何もどっちかがどっちかの仮の姿、遊んでるのかまさか、って分かった事にでもして置けば腹には据えられるかな。もう空っぽな腹じゃ据えても知れてるけど。

あはは腹なんてもう有りもしないに決まってる。あいつに持ってかれて景色のあっちこっちにばら撒かれてるよ疾っくに。腐ってぷんぷんしてる。ふんそこまで分かってんならもう何。さっさと何処かへ、と言っても、決してこの景色の何処かでない何処かへ戻ろうかな、ってずっと思ってない？　今更でもそう分かったなら幸先良いよ悪過ぎにしては。だって声が残ってる、も何も声しかない、なら、声が残ってる、なんて言える誰も残ってない筈。声の何処かに声とは違ったものが混ざり込んでいるとか、そいつにだけ声を声と聞ける耳が備わって。その耳が聞くのか知らないけど、何か疲れて来てないか、残った声が出来るのはただ、少しずつ疲れる事位、でもそうして出来る事だけが出来ているなら怖いものなし、やっとね、こうなるまでは怖いものだらけだったって事、そうとも思わなかっただけで。いや違うずっとそう思っていた。だから声なんか当てにせず、だって疲れるばかりの声なんて聞こえない方が増し、それが残るのは声の好きに任せるけど。誰の何の耳がそれを聞いてしまうのかな。いやそれはきっと、偶偶声が聞こえてしまうので耳って事になってしまうけど、例えば光や影が来れば目、匂いが来れば鼻、旨そうなものが転がり込めば口、そんなもの。なら疲れた声も聞けるだけ増し、って事にもなりそうかな、ならない。だって声は疲れたりしない、決まってる。耳が疲れて疲れた声に聞こえるだけ。で耳が疲れるのは、もう用もないのに聞き続けるのを已めないから。声

なんてもうすっかり消えてないのかも。疲れた耳が耳を耳にして置きたいために、耳をこっそり震わせるかして鳴らしている耳の音。じゃあそれを声と聞かなければ、どう。それはその通り耳の音だって。それなら耳だけのためだけでもなく何かの用に立つのでは。いや声を聞かない耳の音って何。声を聞かないならもう耳じゃない。それに替わる何も来なくて、目にも鼻にも口にもなれないなら、何も聞けない見えない匂いも味も分からない、ただじっと何も感じないで。いや却ってそれで、何もかも感じ取って全てを知ってしまっていながら、ただ変梃な、でもないなら在り来たりな恰好で、お好みの狭くて風も来ない辺りでぬくぬくとぶら下がって、声も声を待つ事も声を届ける用も初めからなかったかのように。でもぶら下がるなら、何処かを見下ろしていたいんだけど、その何処かが見付からなくて、だってそれは、そっちから呼ぶ声が頼りなんだから、それともそうでないならこっちから呼ぶのも。いやどうかな、こっちから知らせる事なんて何にも聞かされていないのは、（二〇一五年三月二十七日）

（食い物なんて何処からだって…）

食い物なんて何処からだって手に入る。欲しけりゃ幾らでも恵んで遣れる、

しかも取れ立て、ホカホカだぞ。それで、でも手元に少しも残らないとなると、腹を空かして恵んで貰う羽目に。何時もの事だが誰からも、憐れまれるどころか罵られては、そっぽを向かれる。辛いは辛いが、それきり動けなくなるでもなく、また走り回って、あっちからこっちから食い物を引っ掴んだりしていれば遣り過ごせる。なんて事でも済まなくなれば、食い物を欲しがる奴らなんかの目の届かない辺りにまで足を延ばすしかないが考えてみれば、初めからそうしていれば良かったかも。なんでこんな所に入り込んでしまったか。分かったところでどうなるでもない。入り込むしかなかったから入り込んだだけ、とでも思っておこうか。それともそれを分かると言うなら、何処かのそいつに分からせて置こう。そいつのせいか、こっちはずっとボロボロだが。尤もずっと襤褸を纏って腹を空かして何時も独りで膚はくすんで唇は青く何処を彷徨き回るも勝手というのは、のんびりして居られて悪くない。そんなんだから、こんな所へ踏み迷うような事にもなってしまうなら身から出た錆って訳か。で、ここは何処かと見回せば、食い物を欲しがる奴らなんて影もないが、どうやら食い物も少しも見当たらないような所で。ここら辺りにはここら辺りのまた別の食い物の探し方があるかも知れないが、どうか。なんてのはのんびり過ぎて虫も良過ぎるんで、腹はどんどん空いてどうにもならない。で野垂れ死にか、やれやれ、とボロボロの身には、相応しくもあるが、どうやら腹が減っただけでは

斃れない体らしい。いや、体って何。確かに身に襤褸を纏ってはいるが、襤褸を剥がして何が出て来るか、確かめた覚えもない。腹が空っぽどころか、襤褸の内側がまるきり空っぽとか。そんな事もなかろうが、空っぽの代わりには、ただ空っぽの代わりになるだけのものしかなさそうで。きっとそうだ。何だか知らない、影とでも呼んで置きたいが、そう呼んでしまっては少しもそれらしくないような。ならば、体で良いのでは。空っぽの代わりになるだけの、何の取り柄もないのっぺりとした、そうは温かくもない体。のっぺりし過ぎで腹も背もないような。でも長く伸びてしんなりとした胸だけはあって、それが伸び縮みする影のように、だらしなく息づいてはいるらしく。ならやっぱりもう粗方影じゃないか。そいつは襤褸を透けて、じわじわ脹れて、でも行き場もないので、その行き止まりの辺りへ、大きな影の姿に自らを描こうと滲んで沈んで行く。そうして何を描けただろう、すっかり形を失った、でも色だけは見た事のないような妙な色に変わりながら消えない、しぶとく古い薄いのに深そうで剥がれない傷痕のような、そんなものが有るべき形を求めて少しもそれを探り当てられないかに蠢くのを已めないような。ふん、そんなものなら、その姿を追ったところで何ともならない、そんな事より食い物だよ、息だけしてて済むのは今の内。なら、くるりと向きを変えて戻るしかないって事か、偶偶踏み迷っただけだった筈の所へ。まあいいさ、だけど、ここからは踏み迷うんじゃない、

だからだ、ただ食い物を引っ掴んで走り回るような真似なんて、もうしない。ボロボロも好い加減、窮まってるじゃないか。食い物なんて、欲しけりゃ欲しい奴が探せって事。だけど、そうだここで、捉え所のない大きな影の姿を活かせるんだ、奴らの目の中に必ずその妙な色だけの暗そうな姿を映し込んで、奴らの追う食い物を見窄らしく不味そうにして遣ろう。見窄らしいばかりじゃない、影がどんどん大きくなれば、奴らの獲物は痩せ細って。そんなものを次から次へ眺めていれば、走り回ったりしなくても、息だけしてて、それで何もかも遣り過ごせそうで、そこでまたくるりと向きを変えて、戻って来た方へ戻って行けば、（二〇一五年三月三十一日）

（闇と罠は…）

闇と罠は一つであるかに必ず闇には罠が仕掛けられていて、罠に嵌まりたくないなら闇を避けるしかないが、そうも行かない。そうして闇を抜けようとして、何処から何処までもが罠なのだと肝に銘じる。そうしかないが、実はそれが闇の罠で、しかもそう分かって却って罠から抜けようもなく、そうともちゃんと分かっているが、愈愈それで抜けられない。それならと、すっかり罠など

忘れ闇に身を委ね、或いは委ねる振りで、隙を見付けて罠を抜ける、などと言う企みのまるで通じないのも常の事。しかし闇は、ただの切っ掛け、如何にもそこに罠が仕掛けられていそうな虚仮威し。昼間だろうが闇夜だろうが罠は何処にでも潜んでいて、昼間の方が逃れようはなく、なので心も定まる。闇夜では、闇の仕掛ける罠と如何にも渡り合えそうな、或いは渡り合うのを強いられるようで、それで心は定まらず、好いように遣られてしまう。などと分かったかのように歩いていると真っ暗で、上り坂が下ったり下り坂が上ったりと道に迷っていて罠どころではないが、罠に嵌まる位しか手立てもない。と思う程に、闇にふわりと浮かぶばかりのように闇は柔らかく続いて、罠に嵌まれそうな兆しもない。それは闇だから。闇ばかりを、どうほっつき歩いたところで薄っぺらな闇ばかり。「旨そうなものを負ぶっているね、一つ食べさせて貰おうかな。（ガリガリ）」急いで振り返ると、頬にひやりと冷たく硬いのは、負ぶっている真っ白なつるりとした一本の骨で、胴よりずんぐり太く、頭一つ高い。しっかり縛り付けられ、背をぬくぬくと温め、縛りを解けば好きに何処かへ転げて行きそう。凄く見覚えがある。骨が、では多分なく、骨に絡まっている細い糸か何か。いや絡まると見えたのは、その何本かの影が斜めに細く走ったからで、それはびっしりと骨の隅隅までを覆い尽くし、白く輝くのは恐らくは、その骨の形だけを照らして際立たせるためで。なのでそれは骨のようには見えて、骨

かどうか分からない。それとなく背で揺すると、空っぽのようにそれには重みがなく、闇を抜けてまで背負うものなら食い物しかないが、それを粗方、声の奴に食われてしまったか。なら放り投げてしまいたいが、縛りは解けない。それとも声が、その重みだけを抜き取って、そうして置いて、ゆっくり腹に収めようという腹積もりか（ガリガリ）。まあいいさ、どうであろうと、それをそのままに闇を歩き回るしかない。そんな事より罠、罠に嵌まれないなら罠を自ら拵える。骨の形の白い輝きしか使えるものがないなら、思い切り前につんのめって、その輝きを闇の拡がりへ突き刺して行こうかな。でも何だろうその恰好（ガリガリ）喧しいぞ。そうだ、喧しいも使えるな。喧しいんだよ骨の形の輝く白が。するともう下り坂ばかり、ひっそりと音を立てない湧き水の匂いが首を絞めて重過ぎて、ぬるり。滑る足で益益道に迷って、闇の深みにのめり込んでいるのは明らか。すると白は、その明らかな闇の一本道を先回りしてか遠い朧ろなる火で、そこだけ闇を破る小さな奥行きが覗けば、それで縛りは解け、骨の形の背から消えたのは確かだが、声の行方は。闇の中に散り散りに拡がって取り集めようもなさそうに。奴め二度ともう声を晒さない積もりだな、もうガリガリする用もなかろうから。（あはは、火さえ見付ければ、するする回る）は声？誰の？　こっちからでもあっちからでもそれはまあ、罠を拵えようって事だよ、でももう罠だねそれ、ズンズン罠を拵えようって罠にすっかり嵌まって

て止めようもなく。やれやれ良かった闇を抜けられたんだそれで、空っぽの替わりに火を背負ってるようでも悔しいけどどうにもならない。闇ごと声の奴を潰せはしたろうから。「でもどうやってどうやってどうやって。」ほらもう繰り返すしか能がなくなってるじゃないか、そうやって火のように。「あはは、お前、何処からその火を見てるんだ。浅くて臭い暗い水の底で冷たくなって、仰向けで、その空っぽな開きっぱなしの瞳に映る、水面に揺れる月の光りの煌めきが火か。あれれ、月なんて出る夜じゃなかったし。お前の首の骨に絡まる糸が、水の湧くコンコンの音にでも合わせて輪になってぐるぐる巻きなら、きっと救ってくれるかな、火みたいに。(ガリガリ)旨いな骨、おっと喋り過ぎ。」お前はお前の何時ものの罠に嵌まっただけで、のお前はまた、俺だが。「水だの火だの何とでもなる。何ともならんのは食い物だけ、そのための罠なら罠が何ともならん、と何遍分かっても分からんので、(二〇一五年四月六日)

(あちらの事をどうしても…)

　あちらの事をどうしても、この生きているままで知りたくなって、それを知れないなら生き続けるのが死ぬよりもさえ下らなくなって、あちらに居る親し

かった彼らの後を追うのなら、先ずは己の屍を野に晒して孰れ戻って蘇る心得があれば何とかなるって事らしい。その術を教わって早速あちらへと、身を或いは魂を、いや呼び名など要らない、屍からあちらへと抜け出せる己の全て、先に逝った彼らと互いを認め合えるその何ものかを、命には超えられない境を踏み越えて乗り出して行けたとして、さてどうかな。確かに、それきり戻れない恐れもかなりあるなら、そこではもう生きてはいない筈、でも死に切れてないのも確か。蘇るための肉の形を残して来ていては、決して戻れない彼らからは、生き血の匂いぷんぷんの余所者が断りもなく踏み込んで、出鱈目を遣らかすように違いない。そんな事でどうして会いたい望みが叶う。そんな心懸かりを余所に、見覚えはないが直ぐに慣れ親しめそうな小さな姿がほっと浮かんで、その姿は、見覚えはあるが何かは言えそうにない日頃の生業に打ち込んでいて、こちらの姿が目障りなのかすっと休めた手を、硬く真っ直ぐ伸ばすので、その先の真っ直ぐな道を硬くなって進んで行くしかないと知れる。が、その道は低過ぎる闇の重みにポキリと折れて。直ぐに、濡れた薄い布切れを丸く拡げて作ったような、浅過ぎて池と呼ぶのが憚られる、しかしそうであるなら池と呼ばずにはいられないその畔に滑りそうに危うく佇むまま、彼らの名を呼ぼうとするしかない。それで池を僅かに傾かせる風も立ちそうなら、呼べたか、呼べた彼らの名は、それは空っぽで、名とも呼べたものではなさそうだが、それがこ

この名の呼び方と弁えれば、呼べたと、空っぽには目を瞑って。瞑った目に、空っぽな池は真っ白で、そこに一欠片の骨が浮かんで真っ黒で、骨に絡み付く細い糸のような何かは何故か若草色で、何故何故と分からなくなる程、凄く見覚えがある。凄過ぎて目が眩むのを堪えて目を凝らすと若草色は白く褪せ、その色を取り戻すんだと心が決まれば池は一跨ぎで、でもそれで何を踏み越えたんだろうと振り返っても、もう池を探そうとも出来ないのは、池とは何だったか忘れたらしいので。さてそれで歩みを進められても、踏み越えた方へなのか、そこから戻る方へなのか。どっちだろうが、どっちでもありそうで。それより何かを負ぶっているなら背丈を凌ぐ程の、白よりも透き通るように白い骨に決まっていて、その骨を背負えるので歩く形も様になる、その骨の事。それはでも骨なんかじゃなくて、彼らの行方を教えてくれるものでなければね。そうでなければ益益細い足は縺れ、骨は石より山より重くて、押し潰されている。そう思えば骨の傾く方へ知らず足は向くようで、その向かう先に若草を匂わせそうな色でも兆せば、そちらと繋がる細い糸を見付けたいが、糸など絡みそうにない、つるりと丸い石のような小山のような形が影を消して横へ斜めに流れ。でもそれどっちから見てるんだ、こっち？　でもそのこっちがそっちのような。「とそんな風に繋がっているんだよ。」誰。「知らない、けど君に声は掛けられる誰かかな、誰かでもないかも知れないけど。で、池の水が撥ねて水玉が飛ぶ

度に、そこに映る青に抗い流れる雲の底が、君の前に見えているその丸い形で、そこへ繋がっているんだ私達は、って伝えてくれないかな。そしたら君達は時時は、雲の底の若草色の君がさっき見たよねその糸の絡むのを目にそっと溶かし込んで、そしたらそれで、そちらのあちらと繋がる眺めが、ついさっきのあの確かな事かなと、ひらりと流れて、私達のために出来る事が出来るんだ。私達だって君達のために出来る事が出来ようね、そしたらきっと。お仕舞い。」お仕舞いって他には会えないって事？　彼らの居所を教えて欲しいな。でもどっちからどっちに言っているんだか。どっちがどっちともぼんやりしてる事に、凄く覚えがある。そうだ池を眺めて水が撥ねて、「そうだったんだ、そんな事を覚えていたとは珍しいね君は、それでここへ。ならそのまま真っ直ぐ硬く、」違う違う、硬いと暗いは同じだろ。丸くて柔らかくて、その影なんてもっと丸くて柔らかくて、だからここより明るくて。それを掴み取れるなら、それは先に逝ったあの、誰だっけ、そのまだ生きてた時の、「ああ、なら知ってるよ、初めからそう言ってよ。あっちへ行きなよ、どっちでも。」ん、そう言われると会えたみたい、今言われた通りを、会えた彼らからすっかり聞かされて耳は火照ってるみたい、誰誰？なんて言ってた方がどうかしてたんだ有り難う、もう戻らないと。さて負ぶっている骨の重みをゆるゆる重くして行けば、戻るなんて滑るよう、ほらもう野晒しの屍は、直ぐそこ。でも、あれ？今までと違う

冷たさの屍は触れられもしない、触りたいってのも変だし、触れてもきっと何も起きないだろうし。屍に潜り込んで蘇るにはどうしたら。まさかそんな遣り方なんて初めからなかったって事も。まあ、でもこうなったらなったで、別にまた生き直したくもなかったかな、戻って何を伝えたいもないし、とあっさり見切りも付いて踵を巡らしたは良いけど、今滑って来たつるつるの長い坂は何処にも見付からないんだけど。端から忘れられて決して思い出せない夢の欠片の念入りに消されたように、そこには何もなくて、苦し紛れに目の潰れる程に目を凝らせば何処までも透き通るようでも、そこは、そこへと入っては行けないと嫌でも分かるだけの所。「終わりがこれ、って何これ、ってより先ずは、生きられないんじゃないの。も何も、ずっとこうしてここだったなんて、とか、なら、何時生きたのかな何時何時何時、せめてその時を、の時はどっちかって、聞きたいのは誰。いやその誰誰が、いや誰なんてどうでも良くても、（二○一五年四月十一日）

（何もかもが時を経て…）

何もかもが時を経て変わってしまった、などと道道思っていたのは、独りそ

う信じ込まされていただけの嘘で、時などなかったかに何一つ変わっていないのは、戻ろうと思えば何時でも戻れる所をちゃんと覚えていられたのからも明らかで。時がなかったのではないにしても、有った時はさらりと消せる。思い立てば何時でもそう出来るのを、忘れていただけとか。そうして嘘が剥ぎ取られれば、過ごされた時は自ずと風に混じって吹き消され、軽く振り返れば、その振り返る姿の他に何も見付からない。その姿は、それだけ後に残して来た、己の姿を映す立て掛けられた水面のように薄い鏡に映る姿な筈で、その姿の曇らない限り、消されたにしても確かにそこに有った時を、また辿り直せるとも望める。と、これもしかし、そう独り信じ込むしかない、と言えばそうだが、そう言えるだけのそれだけの事、まあ、信じ込まされていただけよりは幾らか増しではありそうかな。さて、そうして時を洗い落とした諸諸の眺め共共、そこへ傾れ込むかに身一つが、何一つ変わらなかった中に収まってみれば、そこでは全く当たり前のように何事もない。しかし何事もないとは、何ともどうにも変なのでは、そう気付けはしたに違いないが、そう気付けたのも何事もないかのようで、うっかりかしっかりか、何も気付かないとされてしまったかしてしまったらしく、何処かそれはまた嘘かも知れないむず痒さも残すが、そのむず痒さに騙されたか、自らを騙してみたくなったか、そうして何が起こるのかなと。当たり前だが、何事もない事が起こって、その危うさもまた、もうここ

まで来たなら、どうとでも見過ごしてみたくなる。そうして危うく何事もない事に委ねられた身が、そのされるがままに、その何事もなさにすっかり晒されるとは、これ程恐ろしい事もない程に恐ろしくはないか。何事かは間違いなく有ったのに、それが全くないのだから。時を消せるようには決して消せない、その、そこにそのままになければならない何事か。間違いなくそれは有る。それを前に丸裸の身をだらりと投げ出すような真似がよく出来たもので、きっとこれは何かの間違いで、その何かのせいで間違いがそのままにされてしまうに違いない。であるならもうどうにもならない、と言う事か、と言えばそうなのだが、そのどうにもならない所へ身を置き直すために、時を消し消し、ここまで辿り着こうとして辿り着けたのなら、事はすらすらと運んでいる訳で、恐れるままに、その恐れるままである限り、何の恐れも怖くないのでは。何事かは必ず起こる、それはそこで起こったので。ならもう、ここでも起こっていて、疾っくにその全てを、改めるまでもなくその隅隅までを知っている、そっくりそのままに。いや違う。全てが違ってしまっている。そこに有った時を消せはせず、時が全てを変えてしまったと、そんな事が起こったに決まっている。いやそうだとしても、何も違ってはいない事も有るのかも知れない。或いは、何も違ってはいないままに、全てが違ってしまっているとか、恐れだけはただ恐れであるままに、それなら何を恐れるもないままに、と。いやもっと確かな事

を確かめたい、確かめられるなら、しかし確かめられる訳がないのは、決して時のせいではなく恐れのせいで、それでやっと分かるのは、時によって何一つ変わらなかったのは、その恐れが変わらずに、ずっと抱かれ続けたからに違いない。では、それを抱くのは何処の何なのか、と問えば、それは時であるしかない。ただ問わずにも置けて、なら時は、ないに等しい。つまり、ここで起こるのは、少しも時の事ではない。そう確かめられたなら、ここは、ここに居てはならない所とも確かめられた訳で、何故そんなここを、何時でも戻れる所として覚えていなければならなかったか。何時か必ず忘れなければならない所と、確と覚えて置かれたからかも知れない。きっとそうだ。そしてその何時かに、ここでやっと辿り着けたのなら、これでもう、覚えていなければならない事からも忘れなければならない事からも、身一つのまま解き放たれるに違いなく、何もかもが時を経て変わってしまった、と言うのもどうやら、嘘でないと決めて掛かりさえすれば嘘ではなさそうで、ならばと勢い込んで振り返ると、振り返る姿は、余りにぼやけて不恰好で、鏡に映っているのなら鏡は分厚く歪んで酷く曇っていて、それはしかし、どんな頑なな嘘も嘘でなかったとなれば、そうでなければならないに違いなく、曇りはしてもまだ鏡と分かるのを心強い望みと喜ぶべきで、その鏡が、呪いに掛けられた呼び笛に呼ばれたように飛んで来て、振り返る姿をむず痒く裏返し、映るもの映るものを壊しては、壊すまでも

なくそれらの疾っくに壊れていたのを暴いて行けば、鏡の用も済んで捨てられるのに、（二〇一五年四月十七日）

（時が欲しいんだろ…）

「時が欲しいんだろ。僅かな時を薄く引き伸ばすったって、いい加減もう誤魔化しは効かない。それ位分かってる筈だ。俺の時を少し削って分けて遣る。まだ俺の時はぐんぐん行けるぞ。」「そうか助かるよ。」「その替わり、俺がお前に遣った時を埋めるものが欲しいんだけど。お前が時を掛けて実を結んだもの。その内の俺の時を埋める分だけな。」「結んだ実は時を返してくれない、こりゃもう何ともならんのに。でもお前のものになって、それでお前の削った時が埋まると言うなら、そうしよう。助かるよ。」って事で、時を受け取った方は、欲しいと言うものは呉れてやり、またちびちびと時を引き伸ばしてのんびりと暮らす訳だが、時の実を受け取った奴は、そうは巧くは行かない。時と時が結んだ実が、全く別のものとどうして分からなかったか、替わりになど成る筈がない。奴は時しか知らなかったに違いない。それとも時さえ知らなくて、時の結んだ実が何だか分からない程に、居たたまれない程に遣る瀬なくも珍しく、

どうしてもそれを欲しくなって、それを手に入れれば、まだ知らない望みさえ手に入るようで、それで陽が傾き掛けて急ぐ手も儘ならずあたふたしてそうな奴に鎌掛けて、話しを合わせてみたら巧く行ってしまっただけとか。で奴は何を手に入れただろう、なんて考えるのさえ詮ない。ただ厄介で役立たずで遂には奴の骸を欲しがり兼ねないもの。そんなものを抱え込んで初めて奴は、時を知る。その厄介ものが、奴の望みをみるみる奪って、それで奴は命の危ういのも顧みず、何だか分かってもいない望みの後を追って、時の実さえ手元にあれば、知らない望みでも何とか追い付いて捥ぎ取れそうな気で力を振り絞る、それの力に限りのあるのを知った時にやっと、時は確かに失われていて、その失われた事を知る事が、時を知る事。こんな話し下らないね、話しを変えよう。「待てよ何で変えるんだ俺の話しだぞこれ、命の危ういとか穏やかじゃない。」それはさぞ、手遅れだったね。それに時の実って何だ、聞いた事もない、時が実の生る花を咲かす木だとでも言うのかな。お前はただ知らない事を知ろうとして、知らずに居るのを終わらせたいんだ、何でも構わない知ろうとしなけりゃそう出来ないし、そうするしかないんだ、それがお前の求める望みで、その望みを抱いてしまっては、何も知ろうともせずに生きて来た事なんて消し飛んでしまって居たたまれないんだな。「何の事だ。」時の事じゃないって事。知らずに居るのを終わらせたければ嫌でも時は、お前の後を付き纏って来る、お前を

急かし急かし。時なんてそれだけのもの。だって知らずに居るのを終わらせたいってのは、一度は死んで、そうしてそっちへ行きたいって事だからな、命知らずに。「ふん、時は実の生る花を咲かす木だが、それで何だ。それすら知らないお前が下らない。死にたくて時の実を取りに来るもんか。それは生きたい俺を生かすって、こんな分かり易い望みがあるか。」死にたいから生きたい、死にたいがなければ生きたいなんて思わなくても生きられる、こんなの誰でも知ってる当たり前。それを知らずに何一つ知らない事もなくずっと遣って来たのはお前の手柄だ、褒めて遣るよ、おめでとう。でももう知らずには済まないとなれば、誠にお気の毒。時の実だとお前が言い張るものの中には、ただ死にたいが詰まっているだけ。さぞかし長い時を掛け手塩に掛け、せっせと詰め込んだんだろうよ、お前の話しに乗った奴は。「そう言うお前は誰だ。おっと消えちまいやがった。跡形もないぞ。お前は誰だ！これがお前を打ちのめす殺し文句だったんだなあはは、先に分かってりゃずっと黙らせて置けたのに、まあいいや。話す相手をすっかり間違えるとこだった。時の実とちゃんと話したかったな、初めから、ねっ。」「やっと気付いてくれました。」「何だ話し掛ければ応えてくれるんだね。」「そりゃそうです。」「もう、こうして語らうその言葉だけを信じて行こう。それで生きて行ける。」「でしたら余り時もない事なんで早速、（二〇一五年四月二十日）

（思い出せないのが思い出しては…）

　思い出せないのが思い出してはいけないからなら放って置けそうでも、独り森でそれに耽っていたばかりに苦い目を見なければならないなら、放って置けそうが裏目に出て身の置き所もなくなるにしろ、その森での事で、ここでの苦い目を拭えそうにもないのは、どうやら森では時が止まっていたのに、まるで止まっているかに速く進み過ぎていたかで、思い出してはいけないのはきっと、そんな森に留まっていた事で、なら、いけない事になってしまっている訳でも、それをそれならと語り出して逃げ道は見えて来ないかな。と言って、語られるのはただ、森森森と、森の時を甦らせようかの息遣いで繰り返すだけで、しかもの森へ行こうともしない奴らの耳へ、では話しにならないし、抑もまだこの喉と口が森の時に浸っているなら、森森森は、遅過ぎるか速過ぎるかで誰の耳にも届きそうにない。なら已めた。森と係わらない森から最も遠そうな、奴らの必ず纏う匂いに就いて話そう。決して森では嗅げなかった匂い。森には例え止まっていようと時は有って、それなら時はここにはなく、時のない中にしか匂わない匂い。それとも時はここに有って、その時からすれば森に時はなく、そ

れなら時の中にしか匂わない匂い。しかも時に合わせて脱いだりまた纏ったりも出来るが、こちらに回す余りは一つもないらしい。苦い目とはそれ、ここに居てその匂いを纏わずに独り居るのが辛い事。それなら話しは打ち切ってまた、奴らと別れ、時が有るかないかのどちらかの森へ帰るしかなくて通る野原は焼けていて、それですんなり、森では火遊びに耽っていたと思い出し、思い出せたなら思い出しても良かったんだ、でも喜んでも居られないのは、奴らの纏う匂いが間違いなく火の匂いだったとも今更ながら思い出されてしまうから。引き返すしかない、その火を探しに。そうしてまた奴らの匂いを纏えない身を晒して嗅ぎ回れば、奴らの責めるような目を逃れるままに、狭く暗い行き止まりの端に自ずと火は見付かる。それは地べたをゆっくり拡がる水のようで、その燃える色で火と分かっても火の匂いはしないが構わない。それを這い蹲って掻き集められるだけ集めて盛るように胸に乗せ、それでまた森へ。焼け野原には新芽もちらほら、時の新芽に違いなく、火が燃やすのは時ばかり。この胸のと同じ火が、森の外の時を全て燃やしてしまって、替わりにそこに、時のない中にしか匂わない匂いが来たのなら、先ずはこの火でこの身に纏わり付く森の時を燃やし、森に火を移して森も燃やし、そうして森の時をなくしてしまえば、森を出ようが出まいが、奴らと同じ匂いを纏えるに違いないが、それってでも少しばかり虫が良過ぎるかなと足を止めると森の中で、胸の火は濡れるような脚

を伝って森の土へと流れ落ちるが、それで落ち葉一枚燃やせない。冷んやりと燃えるのは、土の中のどうやら目に見えないものばかり、目に見えるものは、火は舐められもしない。でもまた今更思い出すのは、思い出せない程前からずっと、この火遊びに耽っていたって事。態態森の外から盗んで来るまでもない、この心地良い火を纏ってしまっては中中抜けられずに。そうならこの火遊びに時は係わらないとも分かってしまった訳で、この森にも森の外にも見付かる冷たい火は何、とまた森を出て奴らに何か鎌掛けてみようと幾ら進んでも戻っても森から抜けられないのはきっと、火も森も時の事でないと分かって、それで時を失くしてしまったから。なら時は森からも森の外からも隔たった所にしかなくて、いやそんなの思い耽るのからして虚しい。なら替わりに何に耽ろうか。時の係わらない火など、時のない中の火の匂いと同じ、そんな火と今更遊べる筈もない。いや遊ぶ為の火とも限らない。他には目も呉れず森の土を穿り回り、滲み出す火をただ集めては積み上げて、その虚しさに苦しみ悶えるのを喜びと思い込めばそう出来そうだが、そんな事、遣らなくても下らないと分かってしまえば遣れない。とは言え、その火とずっと居るしかないなら、先ずは時の事など端からなかったと決め付ければ、何に耽るまでもないと分かる空っぽな心に、深い水を落とすようにその火を底抜けに注いで、その冷たさに見合う呻き声の匂いを弄るように森の土に体ごと塗れれば、森はきっと何処までも火に包

まれると見えて、時の事など愈愈もう決して思い出しようもなく、それで何を呻くもなくなって、声は自ずと高い笑いと響いて、大きな一塊の風に運ばれる匂いのように森から何処かへ抜けて行けないかな。まあ抜けられないね、でもどうかな、とそんな思いに耽っては醒める心を、森そのものの姿と見損なうようで、そんなのもまた下らないと直ぐに分かるしかないのはやはり、決して思い出しようもない位では何とも成らない、あの有るままに止まった時のせいなら、ずっとそうなら、（二〇一五年四月二十四日）

（それ、私の子じゃ…）

それ、私の子じゃない。て事は、その子が私、そんなそれの手を引いてるんだけど。分かってるかな。「何でしょう。」聞こえてもないんだよね、でも聞こえるなら、それは要らないし、なので、まあ良いけど。で、その子の私はあなた任せ、だってあなたの事だからね、一から十まで。私なんて数に入らない。数は嫌い。嫌わなくても溶けて消えて行くけど。でも三つの事は別。三つしかない。つまり、三つ、一つだけ。三つばかりだから、どの三つも、数えるなら一つ、そんなの数えるんじゃないのかなきっと、その方が良いけど。数えてし

まったら、一つばかりじゃ済まなそうだし。でも三つを数え忘れたら、もっと酷い事に。数え出したら数えて数えて止まらなくなる。その子もあなたも諸共に数数数数に弾き飛ばされるよね。私はどうかって？　だからあなた任せだから、何ともない。ただ弾き飛ばされたあなたには付き合えないだけ。数え忘れたって、三つは三つに決まってるんだから、さっさとそこへ戻るだけ。「私って誰でしたっけ、言われてるあなたって、私？　それと言うのは、黙って食って出すだけのこいつって分かるけど。」聞こえてるって分かってましたとも。ならもう、そのそれは私共共要らないって事で。「ですかね。」ただ三つ、一つだけって事も忘れて。だってその子が居なくなっては忘れるしか。「何でしょう。」数。「数なんて聞いてませんよ何も。」じゃ。「数って、数えるんでしょ、でもどうやって。私は数の何を知ってるのかな。いや数よりも先ず私。でも私なんて言ってたんじゃ目も回せない。全く扱い難い煩いものを置いて行かれた。なんら、ま、私は忘れた事にして、数えてみるか、他に出来る事もなければ。数数数、これで数を三つ数えたと思うけど、何を数えたのかな、何も数えていないのかな。そうか数えられるものなんてもう無いんだ、きっと。私私私、なんて言ってみたって何にも数えていないなら、私も無いんだ。数に入らないものは無いんだ、って事ならね。それで構わないと思うけど、なら一から出直しだ、の一って、数なようで数じゃない。だって一って数えれば、その一は直ぐに消

えて、また次の一からって事になるしかないから。一一一一…、何処まで一が滑っても何の数にも入らない。そんな事より、こいつの食って出すだけが、いい加減目障りで。」やっぱりまた、あなた。「またって。初めてですよ、数に入っていない私なのです。」でしょうとも、あなた。初めてなので、またあなた。そんなあなたなので、ずっとあなたの事を数え、数えた数を綺麗に並べて、その数があなたで、その数に相応しいものをまた、あなたは受け取れて、その手を引いて、「何でしょう。」聞こえていないんだよね、って言っては置くけど、でも聞こえてるとも分かってる。って事で繰り返しでも構わないけど、切りなし話しをしたいんでもないんで違う事を言うけど、そうだな、そのもうあなたに手を引かれるのが、私の子じゃなくて、その子が私なのは、その子と私とで三つだから、すっかりね。そのそのままを受け取れるのは、あなたを数に入れないあなただから。数に入れてたら、私達はあなたに数えられて、さあ二つなのか一つなのか、三つには成らない。ああこんなの聞こえてる筈がない。でもその方が良いのかも。それで私は居なくなって、その子も子でもなくなれば黙って食って出すだけの肉の塊で、残るのは何、居なくなった私には知る用もないけど、決してさっきと別のものじゃない。子でなくなったそのそれを持って帰って、知らずまた数数数に嵌まり込んで行って、我に返れば持ち帰ったそれは何処かへ行ってしまって、その数数数の山から滑り落ちて、またあなたを数に入れな

いあなたが、数を忘れて初めから、「いや違う。一つ二つと来てこれで繰り返しが三つなら。そんなの数に入らないにしても、何か私は、あなたとその子で三つに就いて近付けたかも知れなくて。いやでも、かも知れない位では、また数を忘れて初めからになってしまうのかな。でもその、かな、ってのは忘れずに居られそうで、でもそれで却ってもう全ては一一一一…と行き過ぎて、黙って食って出すだけの何も起きない常に戻ったら、その、かな、もその内に忘れて、（二〇一五年五月四日）

（穴が穴の…）

穴が穴の夢を見る夢を見たよ。「穴の中で？」夢では穴の中だったかな。「でも今は、穴が穴の夢を見る夢を見たのを穴に話して聞かそうって夢を見ているよね。」君の何処が穴なのかな。穴は口を利いたりしなかったが。「ふーん、思い出せる限りならそうなのかな。でもこの夢では、こうして話しが通じてる。」これは夢じゃないし、君も穴だと言うだけで、穴なんて何処にも見付からないけど。「穴に穴の夢の話しなんかしようとしてるからね。」だから何処が穴なんだよ、それともここは穴の中。「夢の中ではね。」夢は醒めてる筈なんだけど。

「どんな夢から？」だから穴が穴の夢を見る夢から。「でもその夢の中の穴は穴の夢から醒めていないようなんだな。」そうか、それで絡むんだ。で穴は何の夢を見ているのかな。「だから穴の夢。」穴が穴の夢を見たって何も起こらないよ。「そんな事ない。その夢を見てそれを聞かせて遣ろうって、こうして話し掛けられてる。」分かった任せるよ、どんな夢でも見せてくれ。「そのままならそのまま。穴に入って来てくれないと。」そらね、ここは穴の中じゃない。で何処から入るのかな、何処を探せば良いのかな。「探せば見付かる。」探した探した探した、じゃここが穴なんだ。「うん、でも探さなくても良かった。探した方が見付け易いだけで。も何も、穴って別に見付けられるために穴なんじゃない。」そうか、分からないけど分かったとして置こう。穴としか話せないなら、穴は何処とか言ってたって何ともならないし。「そう、そこまで分かってくれたなら、もうどんな穴の夢だって好きに見られる、例えば幸せが欲しいならたっぷりなれる。きっと。」その、きっと、が怪しい。「怪しむのも良いよ。穴に夢を丸投げじゃ、醒めて戻れなくなる。」と言う訳で、殆ど覚えていないのは惜しいけど、欲しいだけたっぷり幸せな夢に浸れたらしい。で、もう間違いなく夢から醒めると穴の中で、でもこの穴って穴の見てる穴の夢なのでは、と思うと、穴を放ったらかしにして独りで穴の夢から醒めて何になるのかな、何にもならないのでは、なんてぼんやりしていると、「もう幸せはたっぷりと

手に入ったね。」そうらしいね、いやそうらしいのかね。まあそうらしいで構わないけど。でその夢からは醒めたんだけど、それは、その醒めた夢を見てるのかな。で穴の中にこうして変わらずに居るのなら、穴の夢からは醒めようがないとか。穴が穴の夢から醒めるでもなければ。それとも、醒める夢なんて少しも夢じゃなくて、それは、何かの迷いにうっかり迷って微睡んだようでしかない夢に似た夢擬き。たっぷりの幸せもきっと、そんなもの。なら醒めない夢はとなると、きっと穴が穴の夢を見る夢だけで、その夢ばかりを知らず見続けて居られたんで、こうしてこっちは行方知れずにならずに居られるって事か。「穴の見る穴の夢は夢だけど、穴が穴の夢を見るのは夢じゃないよ。」夢じゃない！　なら夢なんて何処にもない。ってそんな醒めない夢を見てるのかな、夢の事なんてすっかり忘れて。それともそのすっかり忘れるのが、夢かも知れない。夢をすっかり忘れる夢を、すっかり忘れて見続ける、そうするしかない。「まさかそんな。忘れて貰っちゃ困るんだけど穴を。夢はすっかり忘れても。でも穴は穴の夢、これは忘れるも何も。」それを忘れて見続けるなら、穴も穴の夢のまま、夢を忘れる夢もその夢のまま、で何が困るのかな。「それではきっと、夢と穴が混じって溶けて夢も穴も無くなるね。忘れて困るのは、穴の見る穴の夢、それとその穴の夢を見る夢。他の何が溶けても、それとそれはそこになければね。なければ！、なんだから、それはどちらも夢で済まない。」そ

の二つが有るのだけは夢じゃないとしてだよ、それは、それだけが醒めない夢、つまりはここにたった一つだけ有って穴の夢を醒めないままにしてもいる、そんな夢かも知れないね。「ふん、こじつけだね、だって夢を数えるなんて。直ぐに醒める、夢のようで夢でない迷いに微睡んだだけ。そう言ってたよねさっき。」きっとそうじゃない、一つは数に入らない。一つは、何かのもう一つがあって初めて一つと分かって、その一つに成る。なので一つと一つの二つも数じゃない。数は三つから。「確かに穴が一つ、と言うなら、入って出れば二つだね。入ってばかりなら、穴とは分かっているにしても果てのない拡がりと同じ。」そんな訳ないよ。何処までも続く拡がりなんて、どう見たって変わり映えしない一つの穴だね全くうんざりする程に。でそんな穴の夢なんて直ぐに忘れられて、夢がないって夢だけがずっと続くんだね、ああ詰まらない。「詰まらなくはないさ。その夢がずっと詰まっているなら、夢でもない醒めるばかりの夢擬きなんかが入り乱れるより、どれだけ楽しいか。」洒落た積もりそれで？　楽しみだなんて下らないもの、うんざりする程何処にでも見付かるじゃないか。「分かった、なら夢はもう忘れよう。忘れて困るのも、忘れられた夢の内と。数えられる前の穴が、そればかりで、一つでさえないままに有るように有る。先ずはそれで、」数えられる前の夢が、そればかりで、一つでさえないままに有るように有る。穴を忘れても全ては忘れられた穴の内と。「だから？」

穴と夢が入れ替わっても、混じって溶けたりしない、どちらも無くなりもしない。もうこれが答え。「え、答えなんて探してたの。穴だって夢だって探さなくて構わないのに。答えなんて探せば探しただけ、楽しみだの何だの蹴散らして幾らでも溢れ出るよ。下らないにも程があるって。」そう、下らないにも程があるので答え。その通り、何がいけない。「言い直す。下らなくても下っても答えは要らない。」その通り、で何。「別に何も。穴と夢が入れ替わっても、混じって溶けたりしない、どちらも無くなりもしない。これはその通り。なら入れ替える事もなくて、どちらも無くなりはしないのは、どちらも同じだから。それが混じりも溶けもしないままで。」そうその通り、それが答えでどうしていけないのかな。「そうか、その通りなんて言い張るのは、夢だけは手放したくないんで、答えと言うのは忘れられた穴の外でも内でも脹らむ夢の事で、確かに夢とさえ連んでいれば過ごせるだけの時は過ごせるにしても、穴にしかその夢を、（二〇一五年五月十二日）

（何処を探し回っても…）

何処を探し回っても、この世はその果てまでも、くねくねはしていても何処

までも平らで何処もが何処ともすらすら繋がって、ただの一つの穴も開けようはない。なので却って穴は必ず見付けようのない何処かにあって、その穴の御陰でくねくねともすらすらとも何とか遣って行ける。とでも考えなければ、考はは穴で埋まって、孰れ頭に頭より大きな穴が開いて、穴になってしまえば穴を考える用もなくなる訳だが、きっとその穴は慰めにも穴ではなく、平らなそこに頭をぶち当てて出来た凹みが精精で、凹みと穴はどう違うかなら、凹みには水が溜まるが穴には水は溜まらない、何故なら穴の世の全ての水の流れ込める所よりも穴はずっと広く何処までも続くに違いないから。とは言っても、穴は見掛けはとても小さくて、いや見掛けが小さくなければ穴とは見て取れない程に兎も角も大きくて、それで小さい訳だが、その大き過ぎては見えないので小さい穴は、小さ過ぎるようでもあって、それで見付けようもないとも思われてしまっても、決して見付けられない訳ではない。しかし見付けようとするならどうにも見付けようのないのも確かで、見付けようともしなければ穴など忘れてそれっきり、と言う事も大いに有り得るのなら、穴の方からこっちへおいでよと誘われるのを待つしかなさそう、それとも待てば待っただけ誘いは来なくてそれを忘れた方が良さそうなら、話しは戻ってしまう。それでどうして決して見付けられない訳ではないのか。それはきっと、穴を見付けてそこへ入って戻って来たと言う話しが探せば探しただけ見付かってしまうからで、いや抑

も話しとは何かと言えば、それが何に就いて語る話しであれ、どれも皆見付けた穴へ入り込んだ話しばかりで、それを話し手が分かっているかどうかはまた別、何しろ穴などと言う言葉はそう一通りには出て来ないし、しかしもし穴に就いて語っていないなら、その声は何処までもくねくねとすらすらと当て所なく繋がって行くばかりで始めも終わりもない。の始めとは穴へ入る事で終わりとは穴を出て戻る事である他にない。或いは、始めとは穴を出る事で終わりとは穴へ戻る事であるかも知れない。穴を見付けていなくても、そこが穴であることも有りそうだし。いやどうしてそんな事が有り得る。穴なんてないのだから、もしそんな話しが有るとしたら、それは話しの中だけの話しに違いない。尤も穴にしても話しの中だけの穴なら、それで辻褄も合いそうで、それなら穴に就いてしか語られない話しの全てが一つの穴なのだなどと開き直るのも一つの手かも知れないが、それで始めも終わりもなくて、それをどうにも穴と分かりようもないとなれば、穴はまだ誰にも見付けられていない闇の向こうでクルクル回る闇の色をした星かも知れない、なんて軽口も叩きたくなるが、いや待てよそんな軽口が叩けるのも、ここが穴か、でないなら穴は直ぐそこで何時でも行って来られて、そんな穴の御陰で遊んでいられるからで、それでどうしてこの世の果てまで穴の開けようもないなんて思えてしまうかなら、何処もが何処ともすらすら繋がっているからに違いなく、例えばうっかりかちゃっかりか

穴へ転げ落ちたとして、先ず出会うのが、さっき穴へ出向こうとしている時出会ったばかりの穴なんて知らぬげな涼しい顔の奴で、戯れに穴は何処かと尋ねてそいつがさっきもっと涼しい顔を作ってすっと穴の方を指差したように、そこで穴の更に奥がどちらかを尋ねれば指差して、そちらへ行くと危うげに先は塞がっているが、その奥はきっと穴へ出向く前にそこで体をちょっと休めて置こうと一眠りしてた所で、そこを開けて、するとそこが全くそうではなくて知らない誰かが誰かと濡れた裸でせっせと体を扱き使っていたにしても、抜き足差し足で通り抜け、その先のどんちゃん騒ぎは、穴へ行ったら遣らかそうと昨日から企んでいた騒ぎそっくりで、直ぐ様その中へ飛び込めば、どんちゃん騒ぎはひっくり返って、とはつまり静まり返れば身一つに立ち返ってごろごろと転がり出るのはお手の物、はい元の穴の外、話しと言えば何時もそんな話しばかりなので、そうして繋がるばかりでは、そうは繋がらないのが穴なら、穴は何処にもない事になってしまうから。しかしそんな何処とも繋がらない穴が、何処とも繋がる穴の側か遠くか凡そまるで違う何処かに有って、ただ有るにしても決して話しには出て来ないなら、きっとそのせいで穴の話しが飽きもせず語られ続けるのかも知れず、止め処ない穴の話しをその更に湧き出すままに仮に全て一所に集められ、それら全てを一つに溶かし込めるとしたら、その何処とも繋がらない穴の話しが、ひょっこり穴を突き抜けるように語り出されるな

んて事ならそれは嬉しいが、まあそんな話しになってしまえばそれもまた、何処とも繋がる穴の話しで。とは言っても、そうであるなら却って、その話しを綺麗に引っ繰り返せば（でもどうやって）、何処とも繋がらない穴が、開く筈のない穴をぽっかり開けて、さてそれは何の穴ですかと尋ねても、きっと何の答えも返って来なくて、なのでそれに就いて話そうにも、その穴ばかりは話しの穴へは落ちて来ないなら、その見掛けがただの凹みであるのも、（二〇一五年六月二日）

（殺しなんて少しも…）

殺しなんて少しも面白くないし、何故殺したかったかも思い出す用もないので忘れたが、殺したい奴は一人残らず殺してしまって殺したくもない奴まで殺そうとも思わなければ、もうしたい事もないし、今更何も出来そうにない。それでたっぷりと厚い暗い色の布をぐるりと身に纏って顔も隠し、手だけは施しを受ける為に出して歩き回っていて、ただ手を差し出すだけで、それが何のための手と彼らに分かって持ち合わせの幾らかを握らせて来る。しかし分からない者らは、その手が数え切れない程の人を殺めた手だと、はっきりそう見抜け

はしないとは思うが、それとなく手の甲に何かの悪い兆しのような翳りを見て取って、眉を顰め目を背けるのが常なのに、中に捜し物を見付けたように妙に嬉しそうな、私ならあなたを分かってますからねと言う顔をして来るのが混じって、尤もそれだけなら別に罪のない奴らで一人ずつなら放って置いて済むが束になって掛かられると少しややこしくて、こちらを見付ける度に指差して来るので、手を思うように使えない。使えないどころか人目に触れるのも憚られるのは、そいつらの指差す手が次次に繰り出されては、こちらの手が、何の為の手か伝わらないだけでは済まず、それがとことん殺しに使われていた手とあっさり見抜かれて、どんな仕打ちをされるやら或いは身内を殺された者なら仕返しをされるやら知れたものではないからで。しかしそんな事なら、返り討ちにしてそいつらを皆殺しにすれば済むのでは。などと思っている内に、痛みもないまま利き手の掌が切り取られ数知れない血の匂いを消せない尖った五本の指ごと持ち去られていて、利き手でない方は施しを受けるにも殺しにも使えないと分かれば、そんな手は人目に晒すだけ危ういので厚い布の奥へ仕舞って置くが、この先どうすれば食い物にあり付ける。いっそ野山で獣のような狩りでも出来れば良いが、それも利き手がなくては難しそう、とも言っていられないなら兎も角も片手で試すと、面白いようにその手に獲物が掛かる。ただ殺すだけの手と殺しはしても食うための手では違うらしい。いや、手などさも働いて

いるかに口の下でぶらぶらしているだけで少しも使い物にはなってなくて、全ては布の下に潜ませ牙を隠した口の仕業に違いなく、外目には一塊の厚い布の中に獲物が独りでに引き込まれてしまうとしか見えないのでは。そんな事なら、ただ食うだけなんだから、顔も体も隠す事はない。重い布なんて脱ぎ捨て、殺して食うだけの口を好きに飛び回らせる。そうしてふと見れば、手も腕も顔も体も磨り減って、ただ何時も血塗れの牙剥き出しのぶるぶる震える厚い唇の口と、それを取り囲むどろりと黒っぽい分厚く石より硬い血の塊の姿をしていて、それは余りに丸っこくて転がり出したら止まるのが大変でもそれなりに身軽で好きだったのに、水に映したりしてそれを面白がっている内に、血の塊からまた頭やら腕やら脚やらが生えて出て、前より一回りか二回り小さな白っぽい人の形にはなっても、失われた利き手だけが生えて戻らないのが何とも嫌で、もう食うも殺すもどうでも良く、その手さえ取り戻せたらそのまま木乃伊で構わない。とそこへまた私ならあなたを分かってますよ顔の奴か、どう見てもそいつが利き手を切り取り持ち去ったに違いなさそうだが、行き成り詰ったりしても得は無さそうと黙ってそれとなく利き手の欠けたのを向けても、奴は面白そうに顔を背けて取り合おうとしない替わりに食い物を差し出して来て、それは血の匂いもしないならきっと木の根っこ、噛ると噛れもしない水のように柔らかくてそれで直ぐに何処へ行けば分かって真っ直ぐ走って、木の匂いのプンプ

ンする、見た事もないならきっとずっと遠くから来て初めて根を張った木の前まで来て、失われた利き手はその枝にぶら下げられてあっても人集りに阻まれて取り戻せそうにはなく、それでも手を伸ばしていると、その利き手でない方も痛みもなく切り取られてぶら下げられてしまい、並んで飾られる利き手の方は古い血のように黒黒と後からの方は全くぶよぶよと白っぽく醜く、とても見ていられず目が潰れ、また牙剥き出しの口と血の塊の姿へ戻るようで、誰もそれを止めないなら何としても黒黒と尖った利き手に食い付いて呑み込んで、それに肖ってまたもっと鋭い身の熟しを繰り出せればと飛び上がれば、その身もまた枝にぶら下げられ笑われ、そうだ笑われるなら恐れられもする、飾られるばかりでは済まないぞ、それならきっと、身と利き手でない方は放って置かれて腐って溶けても利き手は油を塗られてそのまま残されて、だって恐れるもの姿形は目に触れる所に置いてそれを忘れずにいなければもっと恐ろしい筈、で、珍しい木の枝振りと利き手の五本の指の形はそっくりじゃないのかな、奴らのさして醜くもなく在り来たりなぶよぶよの手に触れられて乾いた笑いのような擦れる音が重なれば、この木と同じに何処か遠くから来たその遠くを楽しくも思い出させてくれそうで、その音の強くなったり弱くなったりの漣のような連なりは、と憶えているのはそう、心付くまでで、（二〇一五年六月二十四日）

（道を誤ったでないなら…）

道を誤ったでないなら何を誤ったか、念のため振り返って確かに引き返す道の跡形も無いなら間違っていない筈なのに、辿り着けば暗闇の筈が何やら明るいのは何。と見ればそれは尖っていて、もっと良く見れば細くても緩やかに色色な向きに丸みを取り込んで、その丸みも、何処か丸みを受け付けなさそうな事がその艶に数知れずばらけて映し出されていては、一度丸みを見失えば再びそれを目には捉えられそうになく、それなら丸みはもう見失われたか、確かめようもないなら、そんな事より暗闇は暗闇でなければならないだろうに、何故暗闇でもありそうに明るいか。引き返す道が要らないのは道の終わりが暗闇であればの話しで、明るさの紛れ込んだ所から道も無くては引き返しようもない。暗闇でなら、行き着いた暗闇の数だけ、狙った女を仕留めて来た。と全くこれまで疑いもしなかったが、確かに殺ったか。ただ暗闇の底の息の音を立てるぬくもりへ刃を突き立てては来たが、それで闇から弾き飛ばされるように、熱い体に触れもせず返り血の匂いも嗅げず、そこから姿を眩ましてばかりで、果たして殺して来たなどと胸を張れるか。何も殺してなどいない、とそう思い込めば呆気なくもその通りでは。抑も殺したい女だが、そんなものにどう狙いを定

められる。女の姿形など、どう捩曲げようと折り重ねようと、どれも呆れるばかりに同じでただ白白と見分けなど全く付かずに。闇雲に女を殺す程に力を余している訳もない、全く余っていない。暗闇なのでふらふらとも足は縺れないが、明るさに遣られては、あっという間に地べたを這わされるに決まっている。力など少しも持ち合わせていなくて、ただ殺せる女が道の終わりに居ると思えてやっと身は滑るばかり。なら女なのだ、姿形どころか居ようと居まいと、それを殺したくなって暗闇へと導くものが。他に女など知らないし、知れたところで知れている。でその女が明るさに攫われたかで。いやそれが何。明るさなど知った事か。暗闇の底へは狙いを定められるのだから、何時も通り刃を、の抜き身が闇の明るさの硬さにぐにゃりと伸びるように輝いて、聞き覚えのある女の叫び声が思い掛けない辺りから上がって、振り返る勢い余って外を眺めてしまうと降り積もる雪に粘粘と張り付く温い風を見失いそうが酷く惜しく、いや明るさの積もるのが雪に見えて凍て付く夜の事がくらくらと甦ってしまっただけなのに、何が甦ったのかはっきりしないなら暗闇の底からそれを掘り出すしかないなと見下ろすと、間違いなく女が横たわって丸まって、その息を吸ったり吐いたりの体が益益その形を丸く見せて狙いを定めるには持って来いなのに、刃の先はうろうろと裏返り裏返りして、遂には刃は知らず手を離れ、まだ切れ切れに続く女の粘っこい叫びに全くぐにゃりと絡め取られて、あれは刃な

どでなく、あの冷え切った白い夜に来た女を暖めるための小さな炎だったのでは。そうだ女を暖めてはいけなかった、それで女を殺してしまった。と思えるあだけで、女の命はそれだけのものと決められていたかも。いや違う、少しもあるの夜の事ではない、間を持たせるのに作り話しを紛れ込ませただけ。炎と言うなら何となくそれらしいのは例えば夜ならではの彼らの振る舞いで、それがぐにゃりぐにゃりと裏返り続ける刃のように、女の体を思って優しく暖めたのが徒で、溶けた体の女は暗闇の底へ沈んだ切り音もない。と言うのも作り話しに決まっているなら雪の眺めを闇の外へでも振り払うべきだが、そうするまでもなくまだ叫び続ける女の脂の乗り過ぎた重い体が激しく当たって来て、暗闇が明るさの外へでも振り払われたに違いない、そこに現れた女は全く狙った通りの在り来たりな姿を晒し、腹立たしく、なら暗闇の底は何、と確かめようと暗闇を追う外への目に、雪どころか暑さに草も木も枯れる眺めが狭く拡がるのが映り、その初めに枯れた草の根はもう殆ど形を留めない深緑に光る泥のようで、それが凍る土を焦がれているなら雪の夜は腑に落ちるなの雪の夜の暗闇の奥から、狙った通りの姿とは似ても似つかない必ず殺したい女が、明るく笑うしか知らないかの静かな足取りで遣って来るのを、どうしても先回りせずには居られなくて、暗闇に辿り着く道を急ごうとしたあの息遣いで、硬い凍る土に刃は立たないと知りながら刃を突き立てれば、「必ず殺したい」が先ず誤りと知れ

るのに女の叫びも要らなかったろう、その女はもう黙り込んで暑さにすっかりへたばり暗闇の底へ溶けて消えられないのを俯くばかりに思い悩むようなのに、明るさの底を近道とも知らされず擦り抜けられたか、吹雪に向かって凍った肩を尖らせるもう一人の女に追い付いてしまい、やっと泥のような草の根の吐く腐った息が凍って途切れればもう、ずっと繰り返し「殺して。でもそいつじゃない、その女じゃない違う違う殺して。」と叫ばれていたのだなと今更聞き取れても、抜き身へも挑むように尖らせて来る肩は幾つにもばらけてもいて明るく笑うようにゆっくりと雪に泥み、(二〇一五年八月三十一日)

(始めに災い有りき…)

始めに災い有りき、と来ては何ともならない、とは言え、どんな災いだっけ。そんな古い事なんて忘れてしまっていないかな、とは言え、それは少しもなくなっていない、だって始めが災いじゃ、それを取り除けるものなんて有りそうにない、と言う訳で、それが何かは忘れてしまってはいても、それが常にか度度か、嫌でも係わっては来て、とは言え、それも忘れてる事の内だから少しも心に懸けるでもないんだけど、それで色色な事が起こるのにはそれなりの事は

しないと、とも考えなくて、まあ何とかなるよきっと、だって災いは忘れた頃に遣って来ても来なくても忘れたまま、と来ては。でこんな事もすっかり忘れられる訳で、と言うか、目先に捕らわれれば目先が全てで、だって目先を専らにしなければ、真っ直ぐ先へは進めない。横道に逸れていられる身でもないし、抑もこの真っ直ぐがもう横道の果てかも知れないなら横道なんてないも同じ。で全くそのそれは、土の下からくねくねと鋭く硬く揺らめいて来る細い針に突かれて耐えられない斜めにばかり身をずらされて已まない小さな痛みのように見過ごせない、見過ごしでもしたら、横道からさえ転げ落ち、そうなればもう始めから終わりまで災いかも。でそんな見過ごせないそれに係り切りになれば、後の事は成り行き任せ、でも何時もそうしていてやっと、災いを思い起こさせてしまうような事から身を避けていられる、とは何も分からないかに分かっているようで、後はどうでも目先は目処が立って先ずはやれやれ。とは言え、それで何も変わらないどころか、係り切りになるのに無けなしの身を削った訳で、忘れたままで居られるながらも、始めの災いにまたじわり押し込まれたらしいのは、削られた身の痛みが黙っていないので。とは言え、忘れたままなのでどうって事もない、とも言って居られないようでもあるのは、どうって事もないままに、それは、とは身の痛みが、その行き場を求めるように、ほんの僅かだいけしかし確かに甘い色の小さな拡がりを、雫のぽつりと産み落とされるように

煌めいて、そのぽつりが土に落ちてじわりと滲む音などは、僅かどころか幾度耳にしても限りも知れず何とも味わえない程、と思い込み、その知れない限りへと身を水のように流し込んで、それの甘みは溶けて身と一つになって、そのまま流れ去る訳にも行かなければ、怪しげな辺りへでも出向いて仕込まれたかに、それは重い影を引き摺る或る確かな形となって、ならそれは孰れ始めの災いに立ち向かう姿でなくて何、とは言え、そんな事は忘れられたままなので、それはただ、見掛けに依らず、目先の事をすっかり明るく軽くして身もすっかり軽い。そして直ぐ様、その明るい軽さが他の何とも違う速さを纏い、始めの災いをどうにも呼び寄せてしまうのは常の事、まあどうって事もないが、何しろ災いだけに事をどうって事もないままで済ませはしない、まあどうって事もないが。そうして事は起こる、と言うか、そうしてしか事は起こらないので、それでその事に流されて行くしかないのはそうなのだが、待てよ忘れて拙い事があったようだが何だったっけ、まあそれはまた日を改めてと、いやでもそれじゃこの話しはだらだら長くなりそうだがどうしようかな、も、どうしようもないので、どうしようもないし起こった事を放って置ける筈もないので忘れてと、で呼び寄せられた始めの災いだが、そんなの知った事じゃないけど、その知った事じゃない間はどうしてたかって、そりゃどうにもならない内に、頼りの重い影を引き摺る或る確かな形は、すっかりもう違う姿にされてしまって、

いや姿はそのままでも姿の他がすっかり何か知れなくされて、でもそれしか頼れないし頼れなくても放っても置けないので、だってくて横道に逸れていられる身でもないんだよ独りじゃね、で持って帰って側に置くしかなければ、そこから何やらまた違う重い影を引き摺る或る確かな形が尖って山をも踏み越えたいのか空まで届きたいのかぐんぐん伸びて、いやそうじゃない、確かな形は土にめり込んでさえもそのままで重い影ばかりが独りぐんぐん伸びて、知らない内にまた身の痛みがその痛みの引き寄せたかの甘みに塗れ、でもそれも束の間、またもや全てを、と言っても全てなんてほんの上辺でしかないけど、知った事じゃない事に攫われれば、またどうにもならない内に、頼りの重い影を引き摺る或る確かな形は、いや伸び上がり過ぎた重い影を疾っくに切り取られてすっかりもう違う姿にされ、しかもどうやら忘れて拙いらしい辺りにでも打ち捨てられて、なら取り戻すと考えてしまうのもどうなのかとも思いながら、あちこち探し回って、姿なんて欠片一つ見付からないなら、影を切り取られても残るらしいその僅かな重みで出来ている粉粉に砕かれた欠片でも集めて持って帰って、さてどうしよう。それより忘れて拙い辺りって何処だったんだ、彷徨き回った何処にもそれらしさはなかったがな、待てよ、そうか土の下から来た小さな痛みのようなあれだよ、でもあれじゃ分からないからまた探しに出よう。で僅かな重みを懐に携えて遣って来たのは、歩き巡れば巡っただけまた巡りたくなっ

て切りのなさそうな眺めが次から次に繰り出される、疲れ知らずな限りは全く来た甲斐が有ったと言う所、でも却って疲れが来たらどう仕様もなく、さあどう仕様もなくなって、そこに重い影を引き摺って誘き出されるように現れる色色な形はどれも忘れて済ますなんてとても出来ない息ハアハアな災いのようでも、忘れて拙い辺り、とは分かったぞ土の下なんだよ、違うかなでも、その土に還りたい懐の僅かな重みがそれらへと降り掛かれば、その災い共はまた、忘れたままの災いに取って代わられ、何とも味わえない味が薫り高くも呼び込まれ、それで重い影を引き摺るままに色色な形は柔らかく切り刻まれて、始めの災いは忘れても忘れなくても、残る僅かな重みを燃やし直す火のように明らかに、もうすっかり災いでも何の始めでもなくて、（二〇一五年九月二十五日）

（水溜まりも体より…）

水溜まりも体よりほんの少し大きくても危ないと、これだけはどうでも忘れてはいけない。ずっと土の中なら温かい息は出来て温かい。でも腹は減って震えが来る。そのまま動かないでは、生きたまま腐って生きたまま土に溶けて冷たくなってもぶくぶく見掛けは息をしてるみたいな事になる。なので体より大

きな水の側へも出て行く。水溜まりも怖いのに池なんかの側で脚なんて水に浸かろうなら怖いなんてもんじゃない。怖いだけで肝が潰れて怖さへ身投げするしかなかったみたいな奴も逆さに浮かんでぬるぬる脹れてたりじゃ、縮む脚を翼に水の上を飛びたい位。飛べないけどでも飛んでるみたいに脚は素速く蹴って回せるんだからまあ、これより何の望みも思い付かないなら、こんな今がずっと続いて欲しいな。なんて、ふと立ち止まったりはしなかった、何時も通りだった筈。でも見る間に根刮ぎ違う眺めがぐるぐる回って、で何。知れる訳ない、うんざりな程楽しくなさ過ぎって他は。怒って良いのか悲しんで良いのか、どっちもどっちそうなら放っときたくって、ただ何、何、何が、後もう幾つか繋がって繋がらなくなってそれできっとお仕舞いかな、とも当たりを付けても付けなくても、きっとどっちもどっち。だって根刮ぎじゃあね、息をするのもままならないって。ならもう、何何何も已めた。已めて已められるでもなさそうでも已めた。そんな事より例えば例えばそうだな、大きな硬い大きな岩で出来たこんもりした深く真っ暗な影を裏に貼り付けてる山が、深い池の直ぐ側に大きく迫り出しているなんてどうかな凄く凄そうに。そう思い付くからには、きっとそんな大きな山を見てはいたんだって。大きな山で嶮しくて嶮しいからよし登ろうって奴らはぞろぞろ居るんじゃないかな。そう思い付くからには、そんな奴らの姿も見えてたに決まってる。その中の全く独りぼっちなのが一人

居て、一人で独りぼっちなんだから、そうだなきっと独り取り残されるまで凄く長生きしてしまって居て、でも年寄りとは少しも思ってないのを嗤われてもちゃんと火を噴くみたいに怒れて若い奴らをそっと蔑む事も当たり前に出来るそんな、山が大きい程、とてもちっぽけな身を何時も動かして山が大きくて嶮しい程、毎日欠かさず登っては下りたりしていて、だから独りで、で、なんでそんな事するのかな。「そこの人、何で行き来を、するのかね。」一人じゃ聞けない青臭い奴らばかり、何人も寄り集まって、年寄り一人をからかって土産話しでも拵えようとの楽しみ。きっと答えてくれる、嗄れても女の声の艶で。奴らじゃなく、こっち、とは池を向いて。「災いだよ、あの始めのな、どうでも忘れられない。なので生きてる。災いを見届けてな、始めに戻るまでは死にたくないから死ねないって、分かるか？な」「災いは忘れた頃に遣って来ても来なくても忘れたままなのに？お婆さん」忘れて堪るか！いや忘れて良いよ、遣って来るんなら同じ。でもその災いは始め過ぎて、こっちまで届いてくれないってとこが辛いんで、この話しにうじうじ獅噛み付いても慰めにもならない。情けないけどもう元元池に水浸しで情けないんだから諦めて黙って目を瞑ってると、池の臭い水で鼻の奥までびしょ濡れはびしょ濡れでも止まった息は吹き返し、震えは止まらないけど温温はして来た確かに。こんな事も有るんだね、いやこう来なくちゃ嘘だろ、話しなんだから。話しは嘘でも話しの中では話し

捏ねくり回してせっせと小さな災いを災いとも心付かずに振り払ってる、若そ
かなら、朝女が出て来る麓の川縁辺りでこっちの繰り出した土の底の影の形を
つまりだね、女の御陰ってのが、こっちの早とちりなんだって。じゃ何の御陰
女は何してるんだって、独りで今日も山登りだろ、息も上がらずてくてくと、
が終わってもこっちの勝ち。そんなもの戦いにもなってないんだよ。それにあの
っ組み合いを後にして。取っ組み合いが続く限り、こっちの勝ち。なのでそれ
と引っ込むだけ。根っこの下から躍り出た確かな形と土の上に居座る災いの取
くなら続けるけど、いや、でもう、話しは終わってないかな。こっちはさっさ
の、どうかな、で土の闇を影と引き摺るその確かな形は動き出すし、話しも続
れで、遅れて来た他の災いなら何とでもなる、かも知れない、かどうかな。そ
だよ、その女の忘れない。でも何の災い。始めの災いなら何をどうしても手遅
仕遂げてくれようね。独りぼっちの女とはまるで連れ合いのように。でも災い
の確かな形で応えよう。それはしっかり地に足を付けて、もう必ず思い通りに
時でもそこから躍り出る、土の底の闇を切り取って貼り付けた影を引き摺るそ
災いを忘れないあの年の入った女の御陰なら、根っこの下に埋まっていても何
へまた帰って遣り直すにしても黙ってって訳にも行かない。これが独り始めの
温して来たなら、ぼんやりばかりもしてられない。根刮ぎにされたその根っこ
でなくなるのが嘘、なら話しが止まれば嘘で続けば嘘じゃない。な事より、温

うでそうでもない背の高いやっぱり独りでうろうろしてる男一人で独り、それで女とは切っても切れない絆しではあろうけれど、女と来たら始めの災いの何時また遣って来るかしか見ていない。でそれが遣って来るんだってさ、そう女が言うんだから来るんだろ、何故それで来てしまうかは知らないけど。でも確かそれってもう、さっき若い奴らに構ってたのより前に女の声で聞いていて、それでびしょ濡れで息を吹き返せたんじゃないのかなこっちは、で温温も出来たような。は兎も角、んで大きな岩で出来た嶮しい山が落ちて来る直ぐに、で池も何も押し潰されるって、それに勝る災いって他に有るかって、だって始めの災いだよ。それを忘れてしまえば必ず助からない。楽しい土産話しの筈が、とんだ酷い事に、も何も酷いって思えるのはあっという間で、あっが終われば片付いてる。で山の落ちた跡はぽっかり深い穴で、その丸い息でもしてそうな濃い影を旨そうに呑むように直ぐに海の水がぐるりと入って、こっちの塒の根っこも何も流されようね、でもどうって事ない、体よりほんの少し大きな水溜まりが危ないって何の話しだっけ、ってなもんさ。何がどうなるかなんて知れる訳ない、って訳で、もしそんな渦巻く海の眺めを前にしてぶるぶる震えて居られるなら、そんな体はきっと何処かの根っこまで流れ着こうね、嘘じゃないよ話しが続いているだろ。でも何の話し？ってなれば続かなくなりそう。良いけど、根っこの下で温温出来さえすれば。女も誰も皆何処かへ行ってしまって

静かなもんじゃないか、ただ根っこの下を温温と土に頭を突っ込んで埒に出来るものだけが、水の流れや風の勢いを遣り過ごせて、災いはさぞ始めのまま愈愈勢い付いてもいそうだけど、知った事かって、時は突き崩せないんだよどう遣ってもも、遣りようもないけど。それを忘れずに居ようなんて、賢いようでさて、山みたいな大きな岩みたいな苦しみを背負い続けるようなもの、それを賢いと言うなら生き延びるのが賢いらしい、なんて溺れちゃったら言えないな、それで賢いか。ま、でこっちと来たら、怖いのはもう、体より少しでも大きな水溜まりに足を掬われる事。水溜まりを見分けるのに係り切りで、でもそんななんだからまた、訳の分からないちっちゃな災いに巻き込まれて、息ゼイゼイで、話しを続けたいなら、あの土臭い影の力で何とかなる所まで、他に居なけりゃって居る訳ないさ、うろうろするのが取り柄ならまた川縁かでないなら何処かの水辺へ戻ってる男の、横道へは逸れられない独りで身を削る真っ直ぐでおっとりなでもちゃんと遣り遂げるのを、根っこみたいに、根っこの真似ならお手の物って舌先だけでぶつぶつ呟いて、じっと黙って、手心無しにぬるぬる逆さにされようとも、根っこみたいに何も恨まず待つしかなくて、(二〇一五年九月二十七日)

（さて何処もが何処とも…）

　さて何処もが何処ともすらすら繋がってこの世の何処にも繋ぎ目もその跡さえ見付かりそうにはないが、善く善く、と言っても凝っとでなく、善く善くぼんやりとあれやこれやの過ぎ行くままを眺める振りして遣り過ごして待てば、空や海に背を向けた端っこに、薄っすらと小さな裂け目の息でもしているようにそっと引かれてそのままなのを見付けてしまう。かどうかはぼんやりなままでも、そんなものを探す心はどうしよう。ただ裂け目と言い切っては、繋ぎ目がなく裂け目だけでは、そこはずるずる拡がってこの世はあちらとこちらに別れる切りで、ならただ裂け目のようで、そのあちらもこちらもそちらもない、同じ一つでありながら、それはきっとそこを通れるものには通れるばかりに、目は一つを二つ、こちらからあちら、あちらからそちらと体はするりと動いて、そうしてそこに隔たりでもあるとして置けば、それで何となくそこを通り抜け易そうなのでそうなってしまっている、ってとこかな。でそのそちらって何処だろう、とふらふら彷徨っても見付からないなら、忘れた頃にふと足の向きそうなのは、温かい息だけですっかり埋まって温温と芯まで温めてくれるそんな僅かなふわりとして隙間ともない辺りだが、知らないなそんな所、どう思い出そうにも浮かばないし浮かばなくてホッともする。とは言え、何にホッとした

のかな、それが分からなくて何故ホッとしてしまえるのか、ホッとなんてして拙いのでは。って何を言ってるんだろ。そうだ裂け目だよ、裂け目を裂け目じゃないみたいに言うから、見失った裂け目に足を掬われてたり。でも何を見失うもそれを見付けてもいないなら、それでまた足を掬われそうじゃ何ともね。と、そんなように裂け目はちゃんと裂けている、とは分かれば、さて裂けたのは何と何かな、と言う話しにならなくちゃおかしいかおかしくないか、と考えるのもおかしいようで、何ともね。そう、その何ともね、がきっと何とも何ともなんで、その何ともね、の中へ潜り込んでしか取り敢えずは裂け目から遠ざからずに済ませられなさそうなら、もう疾っくに潜り込んでいて身動き取れずに、いや身動き取りたくなくて取れないだけなんだけど、そんな事で居られるのは、頭の直ぐ上に根っこの生臭い匂いをじじとさせてる根っこが硬く重く押し被さってるからで、ならもう裂け目を跨いだか擦り抜けたか、そんな覚えもないなら始めからそこで温温してた。なんて筈ないよ、だってそうなら裂け目がどうとかなんて何で思い浮かぶのかな。なら裂け目なんて、ふと間違って紛れ込んだ、ここと係わりないもの。か、その係わりないので裂け目かも。で、だからどうって事もない、んなら裂け目は置いて、それより根っこ、も根っこは動かしようもないなら、根っこの下がどうなってるか。ってどうもこうもなかろう、なるようになるままに身も心もその根っこの下とまるで一つで見分け

も付かなかろう。って誰がそう言ってるのかな。その根の下って、継ぎ目だ裂け目だ根の下がどうだの言えるような奴がのんびり独りごちて居られる所かって。温温とのんびりはまるで違う。温温と出来れば出来る程忙しく立ち働かなくちゃいけないかも知れないし、のんびりともう息絶えるのだと分かって震えて果てるのを待てもする。根の下でのんびり常しえの眠りに就こうなんて、直ぐに体が冷えてそこから弾かれて、根の上でならのんびり長い時を掛けたければ掛けて事切れるのを待つのも、何が生きるで死ぬかも忘れてしまいそうに容易そう。だって根だの裂け目だのまるで思い浮かびもせずに、そんなように皆してるから。そんな消えてなくなる話しは根の上の、根の上とも知らずにされる知れた事。根の下では消えてなくなるものなんてなくて、ずっと何も変わらなくて済む程に何時も新しい、って言うか、新しさなんて少しも要らない程に何も変わらなくて、消えてなくなりようもなく、なので新しく生まれるどんなものより新しいけど、新しく生まれるものなんてどうってものでもないので新しさなんて要らない。っておかしな事を言ってしまうのは、やっぱりこれ、根っこの下の誰かの独り言じゃないからで。言葉って葉っぱだもの根っこの下には付きません、なんて茶茶もね。じゃ誰がって、決まってるよ裂け目を探す心がだよ、始めにそう言ってるし。その心が根っこの下に入り込んだか染み通ったかした積もりで、ずるずる話しは止まらない、かってそうかな。探す心に出来

るのはただ黙って、裂け目辺りと当たりを付けた辺りを黙ってうろうろするだけでは。それでさて何かをしてるのかしてないのか。根の上の何処かで息絶える間際になら、それまでして来た事が一纏めにされて心に落ちて来るか、何とも覚束ないので、うろうろするのを已められなくて。「根の下だよね。訳ないさ。根っこを見付けてその下に潜り込めば、根の下。」そうかな？そこは何処もが何処とも繋がってる中の根の陰になってるだけの所では。裂け目を抜けたその奥か先へ行きたいんだよ。「根の下から見れば、あなたの言う何処とも繋がっている何処もは、そのまま何処も全て裂け目みたいなもので。だって根の外は何処もただ根の外で、そんな外に身を置けば何処へ連れ去られるか知れやしないし。」誰と話してるんだかもう、休んで出直し。「折角、根の下と話してるのに、裂け目を間に挟んで。」もう眠いので。「眠いのは、探す心が満たされたから。きっともうそんな心も要らなくて忘れてしまえる。でこれから汗をかくのは、裂け目なんて通らずに、何処もが裂け目の根の外で、その何処もを根の下と同じか、根の下では抑えられてた動きまで出来る、そんな少しだけ硬くて重くてじっとりした奴で、そいつが失われた探す心の後に居座って、あなたの望む根の下のものをあなたの元へなら届けようね。」ぼんやりとしか聞き取れないのは眠いんじゃなくて、声なんてしてないから。じゃ何でぼんやり聞こえてしまうかなら、きっと眠いからで、だってもう眠くないから何も聞こえない。

でも探す心のもう失われたようなのは、辛うじて届いた声が知らせてくれたかな。うろうろするにも裂け目も継ぎ目も見付かりそうにないし、なのできっとこの世の何処かに根の下が有って、なので探すまでもなく、いや違う。探すものは他にあるんだ直ぐに見付かるけど。直ぐに見付かるけど探すのを已めたら全く見付からないように。ならきっと探す心は根の下に置いて来て、それが探らしてくれるのかな。いや違う、なんて考えるまでもなく、もうそんなの忘れてしまって、だって目先に捕らわれれば目先が全てで、この世の何処がどうでも構わなくて、（二〇二五年十月一日）

（もう手に入れたいものなんて…）

　もう手に入れたいものなんてないなって思ったりするなら俺は何もかも手に入れたんじゃないのか、何か呆気ないな、なんてゆったり構えたのが大間違いだったかどうか知れないが、その手に入れたものなんて奴らの役には立っても俺には要らないものばかりで、何故そう思うかなら、手に入れたものを全て擲ってても惜しくないものが見付かってしまったからで、いや見付かったかどうかは怪しい、寧ろそれをどうにも見付けられないから、それを欲しくなるって事

か。なんて俺に考えさせてしまうのは、やっぱり、あいつだ。俺がこっちなら、そっちに居るあいつ。あいつさえ居なければとあの手この手を繰り出してはみたがどうにもならないので殺すのだけは諦めたが、それなら辛うじて息だけはさせたまま生き埋めにでもして遣ろうかと、あれこれした筈なのに、何処吹く風って何時も通りの間抜け面を晒してだらだら生きていやがるんだから、目障りにも程があって、どうしても俺はあいつがだらだらとだけは生きて行けないようにしたいんだが、どうやらあいつがだらだら生きて行けるのはどうしてないのか、目を離さず付き纏った甲斐有ってその肝みたいなものを見付けたみたいで、ならさっさとあいつの所へずかずか出向いて行って、こっちの思い通り、訳ない事さそれを引っ攫って来たまでは良かったが、何だ！これは。何だ！これって言って置きながら直ぐに分かってしまうのは、また恐ろしく見覚えの有るもので、つまり殺したくても殺すのを俺に諦めさせたまた同じものを形こそ違え掴まされてるんだよ糞。うんざりだ、でも俺はきっと知ってるぞ、ここから抜け出す遣り方が必ず有るって。踏ん切りが付かないだけさ。いやそうじゃない、俺は疾っくに踏ん切りなんて付けてる。踏ん切りでないなら、じゃ何だ。俺にはどうにも出来ないものに足を引っ張られてるってなら、ここは腰を据えて、なんてのんびり待ったりしたらすっかり何処かへ消えてしまうに決まってる、毎日焦って苛ついてガツガツと探し続けなければ、次はないようなそんな。

なんて考えるまでもない。災いはどう仕様もなくこっちにだけ降り懸かって来る。何とも酷い災いなのに、決まってあいつにだけは掠りもしないと来てやがる。だから殺したくても殺せない訳か、はっ！また独りで分かったような事を。いいさ、これも俺は分かってるぞ、その災いなんだよ、俺をここから連れ出してくれるのは、他に何もないって事位、どんな間抜けだって思い付くだろ。そんな間抜けの俺も一人だが、間抜けを已めたら間抜けでさえないただケチで威張り散らすだけが取り柄の人も羨む物持ちで終わりだからな。しかも誰にも羨まれないあいつを幾ら憎んでも足らないままにだ。俺の取り柄は違うんだ、俺の取り柄は執濃く災いと取っ組み合ってケチに駆られて疲れ知らずなところさ。それをあいつに見せ付けて遣れば！いやそれでもあいつは何事もなくだらだらと生きて行くに決まってる、だからこっちは苛つくしかないって、ああどうやってケリを付けるんだ！って。だからその焦りを執濃くあいつに押っ被せて、災いはこっちが全て引っ被ってと。これが間抜けな同じ事の繰り返しかそうじゃないかなんて知った事か、俺の執濃さが俺を掴んで離さないし、それを俺は俺の執濃さで執濃く繰り返して行くだけ。執濃さを手放したら、俺はあいつになってしまうか、でなくても、アホなネタであいつと同じに笑ったりしてしまうかも知れない、そんなの、うんざりを遥かに通り越した身の毛の弥立つ俺の姿で。でもその身の毛の弥立つ姿もありありと浮かべば、その嫌で嫌で堪らな

いのがまた俺を駆り立てて、ガツガツ苛つかせてくれるなら、執濃くそうしてそのままそれを続けていれば何時かきっと俺はここから抜け出せる、そうでなくてどうして人も羨む間抜け面なんて晒して生きて行けるだろう。でもあいつに押っ被せようとしてこっちの引っ被る災いの、それは酷いには酷くてその度に腹が立ってうんざりはするが、何処か温いんだよ、片付けてしまえばそれで仕舞いばかりが何とも歯痒いし、でもそこを執濃く見極めて行くしかないのは分かってる。そうだ他に思い付かないなら、あいつがどうとかより、災いだ。俺に降り懸かる限り、酷ければ酷い程、今の俺の間抜け面に相応しいような、やっぱり何か間が抜けてるんだよ、災いが。どうやったらそこから間抜けを引っ剥がせるかだ。何の救いもない何かも台無しにして投げ出して終わりの底無しの災い。そっちへ行けないなら、俺はもう知らずにあいつの笑うネタで笑ってしまっているかも知れないじゃないか。いや待て俺は今、答えを見付けたんじゃないか、そっちへ行けないなら、そっちへ行くだけだ。災いは忘れた頃に遣って来ても来なくても…、なんてあいつのお定まりの言い草にまんまと乗せられてたとは。あいつの言う災い、だからこっちの引っ被った災いなんて災いじゃなく、災いみたいなもので、繰り返しそんなものと遊んでるから、ちっとも先へ進めない。までは良いとして、でどうする、もこうするも、そんなの分かってたら遣ってるより前に、そっちへ行くのってどっちだ？見付かったって

何の答えだ全く。でまた、性懲りもなくあいつから引っ攫って来てしまったのは、何だこれは。炎と燃える陽の光りにでも焼き焦がされた影の燃え滓の粉粉に砕かれて微かな重みとしてだけ手に取れる、こんな有るような無いようなものが、俺に何の災いを齎すってんだ。いや待てそうなら、これまでと違う、これは災いを燃やし尽くした燃え滓で、ぶん回したなら災いを突き抜けて全てを燃やす火にも近付けて行けそうな、そんな火に包まれでもすれば、もうどんな災いとも手を切れそうで、それ程それは有るような無いような、微かな重みなだけのもので、そうだ、これでもうあいつなんか目じゃない、なんて、執濃く追い求めて来た災いからついうっかり目を離したばかりに、火の話しなんて呆気なく湿って見窄らしい陰に呑まれて、（二〇一五年十月四日）

（風の吹かない…）

風の吹かない所でしていたにしても何をしていたか、怠けたら怠けたでも弛まずに。と思いつつ思い出したいだけで、そこに風は吹いていて、していた事も一一分かっていて、いやそれは今居る風の吹かない所から分かるだけが分かるだけで。ならずっと風の吹かない所から風の吹く様の色色を具に眺めていた

とか、にしろ風って何、その。ずっと馴染んで来たものを、一息に吹き払ってしまうのが風なら、それはついさっき、さも初めてのように、さも初めてのようには間違いなく初めて、いきなり大きく吹き渡って、もう何もなくなっているなら、直にまた吹きもしないさそう、吹いたにしろ、吹き払うものの何もない中を透き通って行くばかりでは。しかし一息に、はどうかな、ずっと風は吹き続け少しずつあれこれを片付けていたのをまるで見通せなくて、いきなり何もが吹き払われて明け透けな眺めに、はたと目を見張らされ、そうしてその風の吹き已んだばかりを一息の風となら、そう見誤りもしそうで。で確かに風だったか、係わっていたのが。それとも風など知らずに何処かのその風を吹かせるもの。どちらでも同じならそれで良くても同じかどうか分かりようもない、なら分からないだけ。なら、一先ず風は置いて。と、思い浮かぶのは、風は、と言っても全てを吹き払う風でなく、薄っすらとした軽い香りのひとひらを破れないようふわふわと少しばかり遠くへ運び去る、そんな細く柔らかい風ならふと目に留めたらしい、そんな香りが側から運び去られたのは確かで、それが只事でないかそうでもないかは、その時にはまだ分からなかったが、そうして降り懸かって来た事は、何処でどう始まったやら。抑もその初めを追って時を遡るにしろ、何の事やら、余りにその事である他にない事で有り過ぎては何とも。いや始まりなら、はっきりしないままにも、見付けた事にすれば見付かる。

それはそのひとひらの香りで、だってそんなもの間違いなく初めてで、それから始まるあれこれに係り切りになるしかなく、先ずその遣って来るには風の働きに思い至りそうでもそれは置いて、そのひとひらが事を運び入れ、その事の中へと身は捩込まれて行ったようかと言うと、きっとそんな事でなく、となると風しかないな、もう置いてばかりも置けないにしろ、どう係わらせようも分からないで何ともならないなら、風に舞うひとひらに香り立たせたその花を、見慣れはしても何の花か知れない花を、飽くまでも有りもしないようにそっと挿すのはどう。挿したのでなく始めからそこに何かの影のように咲いていたのに、ずっと見過ごされていたように、そっとでさえなく、かに。で事は、只事でないかのように、それだけで、はっきりはする。花が有り香りが有り風が有れば、孰れその先に待ち構えるのはもう、先の見えない行き止まりか、行き止まりをぶち抜いて先の見え過ぎて何処へも行きたくもなくなる行き止まりか、そんなでもないただ色色とか。で花。まるで花だけが有って風さえその周りを怖ず怖ずと低く回るしかなく、それでは全ては止まってやがて腐って消え去ろうに、花の香りをひとひらそこに揺らがせて、風の逃げ道を開ければもう、そこからは風の見せ場で。とは言え風が、花の香りのひとひらを攫って吹き過ぎたのはもう見た通りで、その行方のさらりとした眩ませ方などが見せ場では寂しい限り。などと、もう追えない風など構っては居られないのは、そのひとひ

らの香りばかりに引き摺られて、花から身を引き剥がされそうだから。それに鋭い痛みを覚える程に、花とこの身は一つだったか。それを知るのは痛みばかりでも、痛みなんて少しもこの身には係わらない、香りも味も音もせず、花の香りの如何にも贋の幻を裏返しにでもしたような空っぽな軽みにしか。にしろ、どうやらその痛みも香りのひとひらと共に風に攫われたらしく、その痛みには身はずきずきと引き摺られるばかりに、その行き止まりに行き止まれば、ひとひらの香りもそれを攫った風もなく、ただ穏やかに、花とは再び見（まみ）えようもなく失われた花の姿が妨げで何をしたくも出来ない身へと追い遣られるのはどうにもならないようで、目を閉じて転げ落ちるなら真っ直ぐ花の元へしかないと思い込めばそこは花で、いや花のどんな風にも震えないその色を花の声のように聞き取れだけはする、何故ならその香りは、また戻るしかない行き止まりの恐らくそのまた奥の何処かへ攫われたままで、花の色形など知らなくても、知ったか振りの耳を澄ますしかないので。そうしてまたずきずきと痛みの引き摺られる身は舞い戻って、行き止まりの何もなくて目の眩む辺りに、傾けた耳の中の花の色を声にしてそっと注いで流して行くと、ゆっくり流れは目の眩む真ん中は避けて二つに分かれ、固まるように暗く閉じて滞り、どちらがどちらか何の印もなければ分かりようもなくても、中を開ければ全く違う相容れないものとははっきり分かって、何故なら、花の色は明るく澄んだ小さな声

と、暗く濁って何処までが何処までかまるで見通せない掠れた声の、二つだったと急いで思い出されたから。で眩むばかりの目はもう耐えられなくて、その二つを開けて見るしか目を潰さずにいられないと思うより、行き止まりが行き止まりであるままに耐えられないかに傾いて、それで先ず一つがこじ開けられたのを覗くと、ただ空っぽであるようなら急いで花の姿を空っぽに重ねれば風のなくても香り立つ小さな花は余りに軽そうで、でそこを動かしようもなさそうで、そうして身が嫌でも傾いて、もう一つが開くと風。これが全く風と言う奴、濁り切った色、訳の分からない形、そうはっきり目に見える風なんて初めて見るに決まってる。で風なら、吹く。と素速くともなく花に目を遣ると、それは小さな花のただ香りだけが、何の香りもしない確かな色形はしていても、ん？では花とは何だったか。などと考える隙もなかったに違いない、風は、何を何とも構わずに、恐らくただ風の為にだけ吹き渡る、それを妨げるものなら全て取り払って。そうだ、そうして行き止まりなど一溜まりもない、その弾け飛んだ中を眩んだ目ばかりが数知れず撒き散らされて行くようで。いや、身はもうひたすらに走って戻って行く、花の元へ。行けども行けども賽の河原でもあるまいに、その数知れぬ石ころも次次皆風に吹き飛ばされて、きっと風を振り切れて戻り着けはしても、確かな花の形に咲く石、それだけは風にぴくりとも動かないにしろ冷たい物言わぬ石を見付けるしかないでは、頼みの耳をどう

傾けようと、そこへ流れ込むのは大きな風の汚い色ばかりで、（二〇一五年十月十三日）

（何時から生きてるんだか…）

　何時から生きてるんだか誰も知らないいんじゃ、とんでもない年寄りには違いないけど、だって肌なんて垢や汚れが染み込んで黒光りしてるよ、肋骨も出てて窪んだ端っこのくすみなんて黴じゃないか、歯も爪も目を背けたくなる汚い色だし、でもとんでもなく若いままにも違いなく、だってでなきゃ痩せ痩けたままそんなに長生きなんて出来る筈ないし、笑ったまま固まったような顔付きとか、グルグルと狡賢そうに回ってて何を見てるか分からない真ん丸な目とか、風の光りの揺らめきとずっと戯れていそうなふわりとした身の熟しとか。で何をしに出て来たか、どうやら銭儲けの話し。今更何の銭が欲しいんだろう、それともただ銭儲けが大好きの銭儲けの為の銭儲けで、それで遊ぶのなら、とても楽しそう。だって要らない銭なんて玩具と同じ、どころか銭程玩具に相応しいものもない、要らないなら欲しい奴に幾らでも呉れて遣って後腐れないしね。そりゃ顔付きからして若若しい訳だ。こんなのに係れば、今が盛りの血の気の

多い怖いもの知らずの奴らなんて、あっという間にぶっ倒されてベソかいて、すっかり老け込んだような事を呟き出すのが関の山、けどそれは後になってそうなって分かるだけで、切った張ったの最中じゃ誰もそんな事思いも掛けない。若さの勢いにすっかり目を奪われて、年寄りなんて見向きもされない。まあそこが付け入る隙って訳だ。で、そんな事なんだけど、そんな事より何より、いや欲しいとも言ってないけど、有って困るでなし貰うものは貰ってね、で無くて困ってるでなし、だから銭なんて後回し、そんな事より何より何だっけ？何も忘れちゃいないけど、色色有り過ぎて話しを纏められそうにないなら、ここに有る何もかもの話し。とは言え、その何もかもの始まりは分かっているんだ、その始まりとしか分からないままでも。それを何と呼ぶか、仮に「ああっいいっ」と呼ぶ、するとそれは全く「ああっいいっ」でだけはない、で呼び名にも困ってるんだけど、その始まりに終わりが有るかどうかってなら、話しの糸口にはなりそうでは。ならないかな。ならなきゃならないだけで、でその終わりなんだけど、まあ一言でなら、何も話す事がなくなってる、それとも、話す事なんて初めから何もなかったのを、そこに見付けてしまったそこが、終わり。ってそれで終わりに就いて何か言えたかな。言えてないならないで、抑もそこなんて何処でもなさそうだし、言ってみようとはしたんだから、言ってみようとした辺りにきっと何か終わりそうな何かが有るって確かめられたねって

してしまえそうで。で、終わり。始まりの終わりじゃなくて、取り敢えずの終わり、と来れば頭の中は空っぽで、と来れば眠くなって、うとうしてまた目を醒ますしかないなら耳を澄ますしかなくて、するとどっかの婆さんが婆さん掴まえて話してるのが聞こえて来るのは、ここはとても狭いとなれば耳の直ぐ脇で人の往き来も何ともならないからね、で言うのには、それがその痩せ痩けた黒光りの年寄りの話し、それもどうやらそっくりの二人組、双子か、長生きも一つの体じゃ足らなくて二つ揃えてやっと収まるとは、念が入ってるよ。その二人がまたしこたま稼いだ話し、だって二人共、銭の詰まった袋を背負ってる、並の者じゃとても背負いきれない、大きな袋がはち切れそうに。いやでもその話しなら知ってる、幾らぼんやりした頭でも、だってその分け前に与ってる訳で、こっちは。それで婆さんの話しが終わりなら耳を澄ませて損したみたいで寝てるのも時が惜しいなって跳ね起きて、真っ先に頭に落ちて来るのは、花の姿が見当たらないって事で、でもそんなもの、なかったかもと思い直すと、次にその花の香りのひとひらが確かに有った筈だけど、それがないのは、全くなかったなんて思えない、確かに有ったのがなくて、それはでも、それの風に運ばれて見失われるまでを、この目で追い掛けてしまっていたからで。でそれが、分け前に与った銭儲けとどう繋がるかだけど、やっぱりそこで、花の姿に出て来て貰わないと、の花の姿が出て来たは良いけど、もうすっかり形からして石

で、なので全くどうにもただの冷たく硬い石で、準えるにしろ何でこれを花の姿に準えられるのかな、って考え倦ねるばかりも時が惜しいと身をふらりと外へ向けると、婆さんの話の通り、銭を背負った二人組、直に見ると双子って程には似てないかな、こっちを馬鹿にしたみたいに笑ってるかないかも分からない位崩した顔で。でも婆さん達見落としてたのか、二人の真ん中の足下で背の低い白っぽい小さな花がぽつんと咲いてるんだけど。でも何の香りもない。よく見ると花弁の一枚が欠けてるのが、凄く心に刺さって見ていられなくなって、やっぱり花なら石でいいや、と振り返ると石が見当たらないどころか至る所、ゴロゴロ石だらけ、どれが花の石やら。それを見付け出して問い詰めないでは、欠けた花弁の刺さる痛みが何か分からないまま、それが耐えられないなら見付けるしかないも、どれも似たような石ばかりで何処から手を付けるかって、うんざりしてるとどうやら二人組が手を貸してくれるらしい、手どころか足で稼いで、もう見えない遠くまで探しに行って呉れている。それからどれだけ経ったか知れないけど、そのどれだけかは待ち続け、やっと帰って来た二人は、手ぶらで、態とか手をぶらぶらさせてるよ、もう崩れ過ぎてどうにも笑えそうにない疲れ切った顔付きで肌艶もボロボロで、腰に括り付けた袋には僅かな小銭しか入ってなさそうで、つい今そこで友達になったばかりのように背恰好の他は少しも似てなくて。二人を待つ間、水も遣らなきゃ見向きもしなかったの

が拙かったか、花はすっかり萎れて、でも萎れたその花は直ぐに見付かるんだね、しかも花弁が一枚欠けたままなのもちゃんと分かるようにその萎れたる形に残っていて、見付からないのは、分け前に与ったこっちの取り分、待ってる間についつい使っちゃったと思えばそんな事だろうけど、で腹も減って愈愈こうしてばかりも居られない、飯の種でも転がってないかって見る先に見付かるのは、きっと花。花でないものの眺めが幾ら続こうと、それらは見付かるのでなく、見付けて来るばかりなので。で、見付かる花に恐らくは香りのなくても、それはもう諦めていて、しかし香りとは何、と思い巡って、香りとはその花の姿に他ならない、ひとひらなりと香るなら、そのひとひらがそのまま花の形を描いていよう、となれば、きっと見付かったにしろ花は、何処にももうその姿を見付けられない。と、そうして、何処を振り返ろうと萎れた花の姿もない。ないが、ないで良かった。そのないならもう、どちらがどちらでもなくどちらへでも足は向く、その足はきっと姿のない花を踏んで踏んで。より遠くへと歩き回れば回るだけ、花は踏む足の下に姿はなくも大きく延び拡がって、この世と同じ大きさにさえ、孰れはなるに違いなければ、もう何も終わりはしない。その花こそ、何時から咲いているか誰も知らない。もう何処へか行方を眩ましたあの二人なんかより、ずっと古くからの一つの命を長らえていて、石という石が風と水に悉く砕かれて砂ばかりの眺めに何処もが覆い尽くされても、花ばか

りは少しも変わらない。それでもまた新しい石が石を産み続ける、その限りのない石の繋ぐ石の命より、更に長く花は生き続け、黒光りどころかどんな色にも輝いて、そんな花の香りなら、訳なく風の中に一息に、誰にも見咎められず、ずっと前からそこで風に浮いていたように、そっと描いて見せてあげようかね、と言う声を聞かない日はない。とは言え、それを描くひとひらの花の香りには、まるで巡り会えそうにない。だって風なんてもう吹くだけ吹き捲ったのではね、この先吹く風なんて残っていそうもなく。そんなで吹き攫われて、何処にも花の姿は見付かりそうにない。それで構わないのかそれでは済まないのか、終わりが来なければ分かりそうにない、その終わりはしかし、石一つ見当たらない事からも、そこを疾っくに通り過ぎてしまったのならもうどうにもならないのならならならないで、（二〇一五年十月十六日）

（水の薄く…）

水の薄く張る匂いに空の匂いが高くからぴたり降りて土の匂いは塞がれ、それは陽のまだ弱く透き通るせいで、何も埋もれて姿がない。僅かでも陽に色が差し、そうして様様呼び出される音が、水の匂いを深みへ沈め、空の匂いを浮

かせて放てば、埋もれていた姿が様様に音に絡まり伝って、土の匂いを先ずは水辺へなりと撒き散らそうにしろ、少し間がある。そんな間を凝っと見詰めてしまうなら、思い残す事もないと諦めるしかないにしろ、それは日日そうで、常に今日を限りと見定めて置けば、その今日でも何という事もない。でその今日の日、見た事もない有りようもないような事が次次起こる。独り離れていた私でさえ、初めて聞く山を突き抜けて行くような音に身はくるくると飛ばされて、我に返れば水の匂いを狂ったように深みへと追っているのは私独りでなく私達は、そんな悪足掻きの末に一括りにされ、水からさえ引き剥がされるらしい。いや、私達でないなら、でない何かが何かをして、また水の中から遣り直しで。とは言えもう私達ではない。そいつは、そいつなりに今日を限りと見定めた弾みで、土を引っ掻くしかないならそれだけをして、水へ引き摺り込まれるのに抗っても虚しく力尽きれば、もうそいつではない。後は、水と土の間を藻掻き回って、どろどろと泥を混ぜ捏ねて泥塗れの、あいつだ。で、あいつは何なんだろう、も、何なんだろうもないのは知れていても、ただ力だけは幾らでも溢れて尽きそうになく、で却ってその持て余すしかない力に捻り上げられ、その力を底知れず溜め込んだ己の影にでも縊れ殺されたに違いない。影は透かさず陽を纏って、それはぐりぐりと分厚い硬い肉になって、命の往き来の激しい所へと、嬲り殺したい奴を探しに行く。そうしてそこで直ぐに見付かる

これ見よがしに力を誇る奴らに狙いを定め、纏めて血祭りに上げて行く。で、それからどうしたろう。その力に溢れる分厚い硬い肉の塊も、何時しか激しい往き来の中へ音もなく溶けて消えて音沙汰なく、それを、一括りから独り辛くも抜け、傷だらけの身で空の匂いを纏って浮かぶ私が、ふらふら傾いては見下ろす先に、ただ水の深みを頼りの泥の匂いをぷんぷんさせる、形のあるようなないような奴らを見付ければ、迷いなく真っ直ぐに降りて、鋭い歯と爪で片っ端から殺して行く。その血を直ぐ様洗い流す水の勢いに圧されるまま、身を泥の匂いが巡ってしまうのは、頭に負った傷の傷口に奴らの泥の匂いが溜まるばかりで消せないからで、そのまま身は弱って何処へとも流されて、それっきり。しかしあなたが、その水の勢いに粉粉にされて行くものの共のその見える限りは見落とさず、目で追っているのは分かっている。いや、何処をどう逃げ切って来たか、土を引っ掻くしかないそいつが、土を引っ掻いているのを見付けてしまえば、あなたはそこで、水に砕けて他のものらに混じって流され、後はただ、そいつがひたすら土を引っ掻いて何時力尽きるかで。しかし中中しぶといのはどうやら、土の中にそいつの力の源の、泥の匂いを輝かせるようなくねくねした細長い虫共が湧き出して、幾らでも穿り出せるからで、それを食って食って食い続けてそいつは、丸丸と太っている積もりらしくても痩せ細るばかりなのは、矢張り泥の匂いがその血を毒するに違いなく、己の穿った穴の中のその血

の混じった己の糞の中で、息の根を止めるしかない。その屍と糞と虫共を、ざりざりと群れ固まって食いに来るのは、形のあるようなないような奴らだが、食う程に、泥の匂いはみるみる褪せ落ちて、形のあるようなないような奴らだが、食ったものがどろどろと溶けて波打って形をなくして行くのだけが、強い光りでも受けているかに浮かび出て、それらが、まだ腹の中で揉まれるか後ろの穴からひり出されてもまた繰り返し噛み砕かれようとされるのかそれでもう一塊に呑み下されて行くのかも見分け難く、穿られた穴など疾っくに埋め尽くしてそれらで溢れ返る。そんなものを凝っと眺めて居られるなんて、きっとそれはあなたの他にないと心付けば、その心は、そこを離れる為にふわりと二つに裂け、微かにも強く澄んだ色の差す陽を柔らかく受けながら、一つは空の匂いを追い、もう一つが水の匂いを追う。それで私は、ずっと私が何処に居続けたか、はっきり分かったように嬉しくなって、（二〇一五年十月十九日）

（嘗めれば苦い…）

嘗めれば苦い陽をゆったり浴びて、温そうな水の嵩は増しも引きもしないので、水面ばかりに目を注いでも流れているとは見えないが、次次に様様の花の匂

いの喧しく流れて行くのは見て取れる。他には時時、朽ち掛けた木の根の裂かれたものが、息絶え絶えに、または静かに息を潜めるまま揺れも傾きもせず、つい今し方放たれたかに流れ去る。その水の上は深く浅く皺が入り組み木肌は灰に近い色と分かっても、その下は影さえなく、水の濁りを知らされても何の濁りか、色さえ定かでなく、水が水のまま長い時を掛けてただ水の色であるだけの水の濁りを滲ませたような。解せないのは、花の匂いの流れ方、所狭しと押し並んで皆浮き浮きと楽しそう、何の憂いもなさそうに。捻くれた風など来ては一溜まりもない筈、何がそれらを守れるか。花の匂いを食い散らかすままに果てた虫や、花の匂いにどっぷり浸かって泳ぎ回りたい獣だって何時寄って来るか知れない。それがそうされた痕もない。微かに花弁に置かれる露の匂いはする。匂いと言うか、舌の上を一雫転げる弾みに香って崩れた味のような、狭まる風の先が行く先を見失って陽の一差しに貫かれて綻びるように。であるにしろ、そんなで花の匂いは守れるか、花の匂いの流れる心は安らぐか。などと、花の流れに目を凝らす俺が獣、長い付き合いの毒虫の仲間の顔だって幾つも浮かぶ、それさえ忘れさせるような。で、どうしよう。飛び込むか一息に。いや獣なら疾っくに飛び込んでいる、なら俺は己を獣と思い込んでいるだけの、何だろう、いや思い返して獣であった事の他に何も浮かばない。と、足元の地べたがずるずる後退るでないなら、花より俺に相応しい匂いを鼻が嗅ぎ付けて

しまったらしい、ずるずると水の流れの側から斜めに後退って、くるりと身が頭を下に傾けば、そこを、驚くばかりの小さな前脚で驚くばかりの速さで真下に土を掻き捲って、掘り当ててしまうのは、朽ち掛けて裂かれた木の根で、それだけがそこに寝かされているからにはそこに生えたのでなく、裂かれたなら水に流されるのが、流されずに隠される為に埋められたか。確かに掻かれた土はふわふわで、土の匂いすらない。なので鼻は、まるで透かし見るように、土の下に木の根を嗅ぎ当てられたらしいのはそれとして、どうして木の根なのかなどと思うより先に、木の汁を吸っているなら俺は、干涸らび掛けてひりひりと喉の渇いた動きの鈍い虫で、そうと分かれば花の匂いを目指し真っ直ぐ飛んでいるにしろ、流れに付いては行けても、どうしてもそれより近寄れないでは、虫なのかもまた覚束ない。しかし虫にしろそれとも獣であるにしろないにしろ、それは俺にどうこう出来るでないとしたら、花の匂いに隠れた何処かに、俺が何なのかを決めてしまえる何かが居て、そいつがどう出るかで俺はどうにでもされる。などと考えてはぐるりとまた木の根で、木肌も見えない程に見知った仲間の虫共が黒黒と集るのをじりじりと眺めれば、ああ虫で良かった、そいつがどう来ようが俺は虫だから虫なんだと群れに紛れて溶け、俺達はすっかり木の根から力を授かって、愈愈打ち揃って花の匂いを襲うんだ、と凄い音を鳴らして流れの側までは来ても、またどうにも近寄れないのは、その虫の羽音

に掻き消されそうでも混じらない、まるで聞き覚えのない澄んで突き抜ける微かな響きを、羽音はそれに触れられようもなさそうなのに羽音の内深くに、確かに聞き取れてしまうからだ、と分かるのが俺だけで、仲間は頼りなく後ろへ退き俺だけが、直ぐ鼻先に花の匂いを押し分けられそうな所へまで迫つて、虫ならに流れに疾っくに巻き込まれて粉粉か、と疑えば嫌でも獣でしかなく俺は、その柔らかく火照る耳に、虫とは比べようもなく耳の奥が引き抜かれそうに、その澄んだ響きを流し込むしかなく耐えられず、流れを外れ、流れから迫つて来るようでまた外れ、抜けて行ける限りを駆け、血塗れの脚を引き摺つて、全くどんな遠回りをしたか知れない、やっとの事で独り辿り着けたその木の根は思いの外、少しも変わりなさそうか。いや微かに香る花の匂いをうつとり纏いさえするようで、鼻先を擦り付けると、朽ち掛けはしても果ててはいない木の根はそこに、新たな細い白い根を幾つか深く浅く土へ伸ばしていて、何故そう分かるかなら、根の土に触れ損なう音が、味のない味のように細く白く、耳の奥へ、根が張られるように拡がるようなので。幾つもの、向きをそれぞれに探るその音の尖った先の蠢きが、花を求めているに違いなくてもそうさせるままで良いか、そうして耳の奥に見付けでもされては、それで、朽ちるのを待つばかりの囚われの身となり果てそう、何しろ花では、こっちは歯が立たない。しかしどうやらどうにも見付かりそうもない、耳の奥は行き止まりで。で何とか

身動ぎだけは許され、それを繋げ繋げて、捩じ曲がる鼻を千切れんばかり緊く木の根に擦り付けてでも、斜め先へ切れ込んで押し倒されるように寝返ると、いきなり空っぽな耳はどんな音も拾えそう、とは言え、落ちて来るのはただ一塊の、湿った土を固めて分厚く脹らませたかの重い音、丸くへ捩れ掛けてはあちこち角立って、そんな姿から分かるのは、その音が、花の匂いの流れる初めから終わりまでを眺め渡せる所に、凝っと動かずに据えられている事で、そうと分かれば俺は獣か何か知れないが、空を切る脚を捻り捻り、そっちへ行こうとするまでもなく、もう花の匂いの流れを丸ごと見て取っていて、それは眺め渡すのでなく、直ぐ鼻先に、その丸く捩れ掛けてはあちこち角立つ、分厚く脹れたその流れの姿を引き寄せている。で、重い音もその姿で鳴るままなら、花の匂いの流れが音か。いや同じ形で却って二つは撥ね除け合うようで、と思えば、重いまま後ろへ回る音の重さは音か、俺を後ろから押し潰す重さそのものだろうが、と慌てて首を窄めて木の根に縋り付きたいが短い脚で届きそうにない。で俺は、思い切り恐れ戦いたのが効いたに違いない、分厚く重い獣の姿など脱ぎ捨てて素速く後退るぬるりと背の冷たい平べったい虫にでもなって、どのようにか救い出せた身をひたと隠せる狭く暗い所から、それをまた覗き見られる。の、それは何だろう。それが丸丸一つだけで大きく構えているのなら、花の匂いの流れが音で音が花の匂いの流れなのだ、と思えば、それはまるでそ

うでなく、全く違う二つの事が、同じ所のただ一つの姿に、少しも重なりなどせずに、何ものも寄せ付けない遣り方で収まり返って。と、そうした考えが酷い痛みにでもなって頭の中をギリギリと醜く回るのは、捩れた獣の身のもう、細い白い木の根に幾重にも捲き付かれ、緊く縛られている痛みのせいではと、
（二〇一五年十月三十日）

（それは私は私にしろ…）

それは私は私にしろ、あいつが遣って来るならあいつに成ってしまう。のも、そんなあいつでだけ私にはあいつだから。恐らくは私にだけに限らずも、とそんなあいつでしかない。でそんなあいつに成ってしまった私、間違えた、私に成ってしまったあいつは、それは私がどうとも知りもせず、あいつの成りたいと見付けた何かに好きに成り済ますにしろ、思うままにもならないのは、その成り済まされた身の抱える諸諸を背負い込む羽目になるからで、初めからそう分かっている。それを楽しみたいだけかも知れない。も何も、楽しみの他に何もないじゃないか、苦しみとか悲しみとかそんな嘘っぱちに騙される程の間抜けじゃない、と言うならそうに違いないとして置こう。とはどうやら、私がそ

う言っているのでは。私の他に誰もあいつを分からなければ、きっと。そのあいつにしろ私にだけのあいつなら、ここに居るのは私だけで、あいつなどどうでも良く、ただ私、いや私だけなら私もどうでも良く、つまり私だろうとあいつだろうと、そいつは、そいつの言いたい事が言えれば、それで良いなら、そいつは何を言うか、と言えば、そいつが何故そいつで、そこに何をしに来たか。となると、それを聞き取る奴も要る、ただ、そいつの身になって側で聞き取るか、そいつから離れて嫌嫌聞き取るかで全く違って、つまり欺かれても欺かれたとも思わないか欺かれても居ないのに欺かれたと思い込むか、とは言えそれは常の事で、それで何がどうなるもなく、でそいつが何かを言ったのは確かでも、何だかどうでも良いような事で、聞き取れはしたにしろ耳には残らず、そいつの姿ごと、直ぐにも何処かへ消えたいように消えたに違いない。でまた私なら私だけが残るか残らないか、残らなければ話しが続かないなら残すとして、どの、どんな私か。も何も、そんな私ではどうにも私で、それならそんな私なんて私と名乗ったり名指されたりされる程でもなく、それでも話しが続くなら、私とかあいつとかそいつとか忘れられて構わなくて、やっと話しは終わらないなら進みそう。でそれは、成り済ます話し、なら成り済ます奴と成り済まされた奴とそれに欺かれる奴とそれを見破る奴。いやもう一人、何も少しも成り済まされてなどいなかったと分かってしまう奴。しかし、こいつは直ぐには出て

来ない、ので先ず、思う事を思うようにしたいと思う奴が遣って来る。しかしそんな奴は何処にでも居て、あっという間に闇に紛れ姿は溶けて、しかしそれを見ていた奴が居て、そいつにはその姿は少しも溶けてなくて、その姿をくっきり目に映したままに話し掛けられる。「で、何をどうしたいの？」溶けた積もりの奴には震え上がるような恐ろしい声。闇を纏って思うようにして居られたのを、行き成り引き摺り出されてしまうとは。答えなければ何をされるか。闇を脱いで、有り合わせの言葉を縫い合わせて纏うようにでも、それも直ぐに分からせるには、誰にも身に覚えの有る事を一つだけ、さも面白いかに語らなければ。で、行き成り命を取られずにも済んだなら、何か巧い答えを言えたらしい。と、つまりは、成り済ましたって事で。成り済まされた奴とそれを囲む欺かれた奴らの熱く臭い息に囲まれて身動きも取れないで、忘れられたままの私かあいつかそいつかどいつかが居て、いやそんなまどろっこしい言い方がまどろっこしいなら、ただまどろっこしい奴が、何時命を取られても何といもならないかに凝っと見付められ話し掛けられ、成り済まされた奴に成り済ましたような顔をして、成り済ました奴と奴らに思わせて、取り敢えず事なきを得ている、そんな。「それは分かったよ、でそれで、何をどうしたいの？」少し慣れて震えはしないけどまた恐ろしい声。と来ては、奴らは欺かれてたのを自ら見破って、打ち揃って成り済ました奴に襲い掛かって来そうで来ないのは、

また次の声を待っているのかな、とその隙を狙うしかない、何も少しも成り済まされてなどいなかったと自らの姿を晒して、いや、晒すように隠して、何故なら奴らには成り済ました奴しか目に入らないので、それで、初めからそいつはそいつのままの、まどろっこしい奴は、思う事を思うように仕遂げて逃げ切れたなら、そいつは真っ直ぐにと思いながらたっぷりの水を湛えて今にも溢れそうな沼は避け、砂混じりの風の舞う小高い乾いた辺りの、外からは見え難い穴へと溶けるように消えた姿は捉えられ、と、それを誰に捉えられたのかなら、見破ったと思い違いをした欺かれた奴らなのは、何一つまどろっこしくなんてなくて、何も少しも成り済まされてなどいなかったかのように成り済ませたかからで、（二〇二五年十一月七日）

（その匂いにそっと…）

その匂いにそっと喉を塞がれ、耳の奥にじりじりと已まない水が響いて、その卵のように重いなら血の塊、と転げ出ると、急いで醒めた目は滑って、霞む先まで張られた水へ拡がるばかりなら、血の塊はと思い浮かべようにも、そう見直されなければならないものは耳の奥にだけは無いと知れて、何時もと変わ

らない水面の朝の色。で、そこに見付かるのは何をして居る狡そうに、何をして居るかなら見える通りと分かるにしろ、それは何をしたくて、そう見せている。ただそれを今知らなければならないでもなかろうと、その見える通り、ぬるぬるとひらひらと影は水に溶かしたかに動き回るそれらに付き合って、その言い草について耳を傾けるのも已むを得ない。それでもう、夜ごとに守って来た一つ切りの掛け替えのないものを差し投げてしまって居るにしても、それで却って心の安らうとは、おかしいようでもそうであるしかない。おかしいならおかしい程、のっぺりと忘れられてしまう、のっぺりだけ残って。の、のっぺりとは、他のどの目も耳も届かない様で、事もそのように進む、匂いは置いて。とさらりと事は済んだなら、それも忘れられよう、と思うより先に、何だっけ、それ。それだよそれ、深過ぎる眠りの夜を草の根の匂う風を掻き分けて抜けて来た、その初めの匂いと係わるそれに違いない。なのでまた、昼から夜へともそのままに抜けて、それがあいつ。影を水に溶かしたかで直ぐにあいつと分かる。あいつがそれなら、それのする事をするだろうね夜、池を巡って池に身を沈める、そのそれしかしない。なら、それに成り済ましたとも見られよう、その匂いでかに。でもあいつがそれなんだから成り済ましようもなかろうに、そのそうとはっきり見えないから、あいつもそれのまま、つまり成り済ましたようなままに、好きに振る舞える。そうなら匂ってしまって居座って、何をどう

するもしないもなく。で、あいつのままで、成り済ましてなんて居ないんだから、池の中にあいつの確かな鋭い濃い影が、深く厚く刺さって、籠もって鈍い音さえ立てそうに池の水に影の重みを重ね重ね降り、その影まで突き破って、あいつの姿がまた現れれば池はきっと危うく傾いだかな。それで何時まで水を湛えて居られるかとも。一つ切りに掛け替えがないのは、影が来るならどんな影も入れてその重みと重なれる、池にしか溜まらない重い水、なら影には甘かろうな。と、その危うく見えてしまってやっとそう知れるようでは、先は暗いと見通すしか、の、暗いを吹き退けるかに草の根の匂う風の塊が、そうだ見覚えが有る、重いかは知れないが確かに耳の奥に響いたあの血の塊と同じ形をして。いや、そうは少しも見えないのは、それは、全く違う形の草の根の匂う塊に成り済ましているからにしろ少しもそれで構わない、どころか、そうであるべきと思いたいのは、その声を聞きたいからで、急いで「いやまさか、とても深い所に池が有る。んじゃないかな青緑の。うっかり池の深さなんて知れているさと、放って置いてしまったかな。」と語り掛けると、「病んでますねそれは、先も知れましょう。」「例えば真下に見下ろす崖の遙か下なら、そんな所まで降りられない、池にはどうにも届かない。それとも深く切れ込む崖と見えるのは、池に刺さるあの影が。」「どんな影も重いままに、落ちて行けると見るや刺さって行きましょうとも、そうなるしかない事で。」と静かに話すその風の塊を見

れば、成る程その影の刺さる隙などなさそう。何故と問うまでもなく、何故かそれは卵の形なのでと答えは出て、その正しいかなどどうでも良いのはそれが答えでないからでも、卵の他にない。で何、卵を池に抛り込めとでも。切り立つ崖が深過ぎ。落ちて行く何処かできっと暗く砕かれ溶けて、その影も形も失って池の水面に、薄っすら卵色の透けた雪の舞うかにはらはらと、ではどうにも。「そう、深過ぎる崖の底を、縁に齧り付いて覗き込んで居るだけですよ、崖とか池とかより。」「崖なんてない、ぅん。で池は？」「有る無しの話しで、どうしたいのでしょう。」「無いより有る話しをしなければ。」「有るも無いも話しは話しに有るも無いもなし。」何だこの話し、影の仕掛けた罠にしては荒っぽい。にしては淀んでる。草の根の匂いなど留まりようもなく。声の遣り取りは必ず淀む、それだけの事とも。なら声も耳も捨てる。で、耳の奥から血の塊がその血の塊としか見分けられようのない形をして追われるように転げ出て。いやそれも怪しく、いや却って怪しいばかりは淀むのを吹き抜けられそうなら、その抜ける道に草の根の匂いを嗅ぎ出そうと前のめりに、と思わず何でも掴もうとして闇でも掴んだかひょっとして、ひょっとしなくても影、掴んだかは知れないで。で影影影と、何をしているかなら、きっと影に血の塊を呑ませたい、そのための卵の形は何処。声を使わず、どう影にそれを分からせ探させよう。それともそうでなく、池などうっかり覗き込むから逆さにものを見てしまうか

で、影を呑みたいのが血の塊で、その影を追うために卵の形が要るのかも。どちらでも有りそうなら無さそうでも構わない、卵の形にしろ。血の塊としか見分けられようのない形の血の塊が、その形のままを活かして、深い崖の底の池から、影を引き抜けられるのならそれで。で、また池か。とその水面は、夜の光りに揺れ惑う、若い棘の先のざわざわと柔らかく連なり流れるように消えそうに鮮やかな薄い漣の、暗くへ向かう端に浮く、狂ったように斜めに斜めへ踊って已まない硬そうに赤い落ち葉の一欠片の見失われるのに、池の水全てがその重さごと付き従うかに、直ぐ間近で、上にも下にも崖の見当たらないなら、影ももう、その影を落としたものに付き従って、それは池を跳ね上がって、池の底にもう届いた影のように長いその形をぬるぬるさせたそれこそが、隅から隅まで血の塊で。血の塊としか見分けられようのない形とは似ても似つかず、似ていてはならず、ではそれは、池の水全ての重さを己の力に変えられると思い込んだかに、跳ぶ。何処へか。その血のざわめく音の、その音の影に吸い取られて消された後の静けさを聞き取ろうとする、そこへ置き去りにされたかの耳へ。その耳の奥深くの、その静けさを微かにざわめく音として聞き取って閉じ込めようと卵の形に成りたがって居る、その音とはまた別のかも知れない音の影へ。で、それは見付かったか。卵は確かにそこに有りそうでも、自ら割れるかしてその形を隠すらしく、血の塊は伸び切っても尚、ひらひらと上へ上へのたくる

ように跳び続け、それでも高くから吹き降ろされる硬い風に圧されれば直に強張って、曲がり拗って突き上がるままに固まって、その何処を裂いても中はきっともう血ではなく、何がざわめくか知れない音を、遙か下の池から吸い上げる虚ろに拗った管のようで、善く善く朧な卵の形ででもその音を、どの耳でか聞き取ろうとするのなら、池の底に置き去りにされて凝っと動かずただひっそり息だけをする、小さな確かな卵の形の水の影に守られた一雫の血の、虚ろの中を輪を描くように揺らぐ音で、しかしそこはどうやら池でなく、森の奥まで延びる沼の深い底の水の全く動かない辺りに、一つ置き去りにされたかにへばり付く泡。で何処かの卵の形に聞き取られた自らの音に目を醒まされたかに泡は、夜明けの光りを求めてゆっくりと泥を払って沼の底を離れ、まだ水面よりずっと下でも微かに届いた光りが泡に映すのは、もうすっかり明けた空の青ばかりの青。そうして、その青を染める青の奥の青より青い血が、空の青を抜けて真っ直ぐ水へ落ちるのが、その泡に抱かれた一雫の血にまではっきり映ったなら、その一雫は見る見るぐりぐりと血の塊となって硬く脹れて伸びて水を裂いて突き上がり、その同じ匂いのする、血の塊としか見分けられようのない卵の形の卵そのものを呑もうとして、却って、その卵の狭い中に閉ざされて響き渡る青より青い血の音に打ち拉がれ、再び塊とは成りようもないかに、たっぷりと止め処なく、どろどろと溶かされて崩れて落ちて行くばかりでは、草の根

の匂う風にその脇をそっと吹き抜けられ、その草の根の匂いはふと、根が時を掛けてじっとりと絡んだ温い泥の一塊を真似るかにくるりと一巻きに纏まって、血の匂いのすっかり消えた池へと笑うように真っ逆様に、その重さを楽しむように軽軽と、今咲いたばかりの花の香りを送り届け、それに応える漣の満ち引きを、（二〇二五年十一月十八日）

（ずっと病んでいた…）

ずっと病んでいたとは、そうか。それでもう先は知れている知らせが届いたからには、この世の終わりに行き着けないまでも、せめてその知らせの出された所へは戻りたい。で急ぐにしろ後どれ程も無かろう時任せ、と来ては、その僅かな時へと微睡んで、この身をそれよりは戻りようもなくしたくもなる。そんな辺りへ迷い込んで居ないか、さっきから。何故ならもうそこへは、戻るのかそれとも行き果てるのか、分からなくも、どの途先の知れているこの世なら、分かりたくもなくなっているようで。すると坂はどんどん嶮しく狭く先へ伸び、いや却ってそれで何としても戻り着かねば、帰らねば、と心も澄んで踏み分ける脚に力が入るにしろ日は暮れて、見晴るかそうとすっかり峠は闇で。時の有

る無しなど忘れそうに。そうして時から放たれ闇にうっとり溶けて、何処へともその闇がすっかり私であるかに。「どうせもう長くはないぜ。」と闇など知らぬげな声。「そうなんですね、いやそうなんですか。」「お前、誰だっけ。」「終わらせるのはあなたですか。峠を越えたら、まさかそれで終わりとか。なら急ぐのも…。」「誰が峠を越えられるのかな。峠は越えるようには出来てないんだが、峠って何だっけ。」「もう私は闇でしょうか。帰りたい、でもどう遣って。」「孵りたいって？卵かお前。でもどう遣ってって？闇で孵る卵なら、どうでも遣りたいように好きな形に成れそうだ、きっとなアハハ。」「それ、闇を良い事に成り済ました積もり位でしょ、いや孵る卵じゃなく、そうじゃなく、帰りたい！でも何処へ、闇ではどうにも。」「帰るも孵るも換えるも変えるも蛙に言わせりゃ皆、さて何かな。お前、闇なら、蛙に成り済ます位訳ないだろ。」「あなた、誰でしたっけ？」「闇でも病んでもない。そんなものすっかり呑んで遣る。蛙が嫌なら何でも好きなのにしな。」「じゃ女。」と言っても好きなんじゃなく、女の何処となく醜いとしか見分けられない顔や歪みのはっきり見て取れる体に成り済まして、世渡りして来たってだけの事。そう思い出せて良かったかな、を弾みに、次から次へ崩れ掛けるように、女からまた女、その晒された傷口を数えるかに。「遣れば出来るじゃないか、よし、じゃ俺が誰か教えて遣ろう、俺はな…。」女の顔はそのままでも生身の顔は背けなければ、そんなのを聞か

されてはきっと一呑みにされてしまう。うっかり耳に入れても、奴の名だけは必ず振り払おう、とそんな事に係ずらわっている内に、酷く疲れて耐え難く、途絶え掛けたもう坂でもない峠道の脇の外向きに傾いた狭い窪みに背中を押し詰めるように倒れ込み、そのじっとりと冷たい土の湿りようを空きっ腹にまで染み通らせて身は固まり、目を凝らす闇の中に何かを見付けないでは、このまま果てる身の姿形を撫でるように目をゆるゆるとでも閉じるしかない。で瞼もすっかり疲れに侵され目を瞑ってかどうかも知れない闇に、赤児のように居心悪く揺られるらしい失われたかの身の重みを探ろうと、目ではない、手でも頭でも全くない、空きっ腹から少し外れた辺りにでもして置こう、その僅かなそこだけ抜きん出るかに傷付き易い血か肉か骨かが、間近の闇の冷たさか暖かさにでも触れようと傾き捩れるようなら、その捩れる向きに、強い白い光りがグンと動いて、それはきっとそこにずっと有ったのに動かなかったばかりに目に届かなかったに違いない、そんな光りに照らされるその光りの中に、ただ影ばかりのように真っ暗な小さな体をした、キビキビした動きから恐らくは男に違いない、その押し詰められたような姿が、真っ直ぐこちらへ歩み込んで来そうで、身を躲せたかどうか、そいつはぐるりと回り込んで。きっとそいつだけじゃない。見付けられないだけで、同じような奴が幾らでも居て、と、どちらへともなく身構えると、真っ白な裸の大きな男が闇をそっと後ろへ押し遣るよう

に、紛れもなくただ独り突っ立って居る。どうでもそこに立とうとすれば、思い切り踏ん張らなければ転げ落ちそうに酷く傾いている辺りに軽軽と。で、そいつは行き成り名乗ってしまう。耳を塞ぐ間もなく、その名は耳の底へ転げ込んで張り付いて、このままこいつに呑まれてしまうのかな、何が出来よう、そうだ名乗り返すんだと思い付いて急いでそうすると、「アハハ面白い。もっと色んな女が出来るんだろ、遣ってくれ。」でもさっき倒れ込んだ弾みに女の顔も体も何処かへ放られて、何ともならなくて黙っているともう、名乗った奴の名も姿もない。で何とか独りで土に張り付いた背中を窪みから剥がして立ち上がった積もりが、食い込むように身は益益窪みに嵌まり込んで、硬い窪みの底に打ち込まれた杙のようで、このままグイグイ打ち込まれて、窪みの奥の硬い岩へ呑まれてしまうのかな、何が出来よう、そうだ杙なら削れるだろうと身を削りたくても、どう遣って。「女だよ女。」そうだな女になれば良いんだ、でもどう遣って。なんて考えるまでもなかった。杙の身を削るなら、そのまま女で。女の身を傷付けるなんてお手の物、そうして世渡りして来たって。なので女の顔は醜くて、体は歪に崩れてる。で身を削っていて女から女へ取っ替え引っ替えしてるにしろ、どうも埒が明かない、ずっとこんなんでどうなる。なんて思って居られた内が花なら、もう花も枯れて何だろう。ただ冷たい土だけが残って、それで心が澄んで身は木の葉のように軽く、窪みから這い出せたにしろ、

闇の中を峠を目指して登った嶮しい坂を、そこへ空きっ腹を擦り付けて、まるで木の葉だな、と嗤えもせず、ずるずる滑り落ちて行くしかないとは。「どうしたんだ急がなきゃ、おい、もう長くないぜ。」とはまた、ふん、決まり切った言い草、いやそうじゃない、そんな事は言っていない。聞き違えてる。何と言っているか、ああどうにも聞き取れないとは。聞き違いを裏返せたところできっと違ったまま、にしても後が続かないな、声。その筈、もう麓まで落ちて板の間に涙目で狭い壁を見詰めて腹這っていて、ここが家なら帰り着けた筈なのに私さえ影もないかに独り切りで、それならそうか、奴の声は、「病に克てなかったこの世はもう、終わってしまった。」とは言わなかったにしろ、そんな事で。そんな事より、真っ暗な小さな体の影ばかりのような姿が、幾つも押し寄せるようにきびきびと踏み込んで来て、こんなでは家とも言えそうになく、で奴らの狙いはどうやらこの私で、逃げようもないなら身を削って削って、女の姿は捨て人の形も捨て、杙にも使えないずんぐりした、それより削りようのない必ずそうでなくてはならない形に削り上げ、そうして彼らに担がれれば直ぐに、じめじめした窪みに放り込まれ、その私にさえ忘れられたとも忘れられたならそれで構わないにしろ、ならこの世の終わりが齎す痛みとも係わらず、ただ窪みの湿りと乾いた糞のような岩の匂いに身は凝り固まって、この世の終わりに立ち会おうとして峠で行き止まってしまった間抜けの名無しの誰やらの、

その成れの果ての形が静かに残るだけ。しかし終わってしまったこの世なら、残るも何も無かろうに。「ま、そんなだろうね。」と、さっきの真っ白な裸の大きな男が、また酷く傾いた辺りに軽軽と突っ立って、笑い顔を静かに背け、招くような狭い尖った背中を向けて歩き出すなら、峠越えの行き止まりの道を少し少しと外れて、削れて必ずそうでなくてはならない形を恐る恐る晒す私は、後を追うしかない。それとも峠など初めから無かったのでは。草生した湿っぽい平らな所を、その何処を向いても薄暗く同じ眺めのせいでくねくねと滑るように、どちらを向くのかも分からずに彷徨き回るしかなく、坂も道も見当たらないでは。しかしこの世が終わったなら闇ばかりでは。と、全くの闇で、男の裸の背中だけが闇に溶けず闇に弾かれた勢いのせいなのかにとろとろ揺られるように丸くなって、その背中がふんわり浮く様に引き摺られるように、間抜けな名を呼ばれ続けてでもいるように、更に後を付けて行くと白い池で、その畔に男と私は卵そっくりになってつるりと白く二つ並ぶにしろ仲はぴりぴりと悪そうで、それで辛うじて身を投げずに済んでいるに違いないにしろ、競うように目を凝らすと、水を湛えると見えたのは、その水を全て呑んで池に嵌まり込み、水面を真似るかに平らに隙なく蜷局を巻いて凝っとしている柔らかそうな大きな白い蛇で、池だった深く尖った穴の底で温められている卵の光るのが、蛇の身の内から自ら白く輝くかにそれを照らしているなと見えれば、全て終わ

った外へ逃げ果てたように男も私も影もなく、その光る卵は蛇が産んだか闇が産んだかが分かるには、もうまるで薄い水な白い蛇が、一匹なのか、身を擦り付け合う二匹なのかが先ずは知れるしかないにしろ、知れるって誰に、と質す声もないでは、（二〇一五年十二月四日）

断片　二〇一五

著者　u_

© 2015 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published